この宇宙（そら）の下で君と

有月 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この宇宙（そら）の下で君と

【Ｎコード】
Ｎ０７３１Ｊ

【作者名】
有月　悠

【あらすじ】
※この物語は前作「この宇宙（そら）で君と出会う」の続編（中間編？）です。前作を読んでいなくても楽しめるようにしたつもりですが、読んでいただいた方が楽しめると思います。

無事レクセルと再会を果たしたミオ。だけどまた離ればなれに！レクセルの故郷の惑星に行くが、そこには超美形アンドロイドや素敵なレクセルのお父様、レクセルの少年時代にそっくりな従兄弟が・・・

。帝国皇太子にも未練を残されつつ、逆ハー状態の帝国ライフを送ります。

君とともに1

「ナータか、よかった繋がった。実は・・・何？もう知ってるのか？・・・。うん、そうなんだ。こっち来れるか？本当か？よかった・・・、って相変わらずがめついなお前は。ああ、分かった買ってやるからすぐ来てくれ。うん、ありがとう」

レクセルはそう言って携帯端末を切ると、反重力（リフター）車を作動させ、車体を浮かせて走り出した。

ミオはリフターの後ろの座席に座りながら窓に顔を寄せて離れ行く王宮をぼんやりと見ていた。

自分の運命の変転ぶりにもう頭も体もついていかなかった。

最初は地球から宇宙船に。フィリス帝国の戦艦が敵との戦闘に逃れるうちに偶然にも辿り着いた地が地球。

そして普通見えないものが見える、という体質のためにミオはこのフィリス帝国の宇宙船艦に連れてこられたのだ。フィリス帝国に敵対する国の新兵器に対抗するために。

そしてその国との戦争が終わったら今度はフィリス帝国の帝都に行くことになった、帝国の皇太子の妃になるために。ミオは帝国の救国の女神として政治的に利用される立場に陥っていたからだ。そして意に染まぬ皇太子との結婚を強いられる。

しかし、皇太子の温情によって妃の座を離れることになり、今本当に愛する人・・・レクセルと一緒にまたどこかへ行こうとしているのだ。

「大丈夫か？」

レクセルがおとなしく座っているだけのミオを気遣って声をかける。

「うん、大丈夫、平気。さっきは誰に電話してたの？」

「妹だ」

「妹さん？」

「ああ、大学生でこっちの大学に通ってるんだ」
「レクセルに妹なんかいたんだ」
「ああ。兄弟は他にない、二人兄妹だ」
「似てる？」
「いや、全然」
「ふーん」
「すぐに会える。こっちに来てくれるよう頼んだんだ」
「レクセルの妹ならきっと美人さんだね」
「君の方がずっとかわいいよ・・・」
ふいにレクセルが真面目な調子で言う。
ミオはびっくりして目を見開いた。
「あ、や、すまない・・・、つい・・・。誰にでもこんなだと思わないでくれよ」
レクセルは苦笑いを浮かべて運転に集中し始めた。
ミオはほっとして再び窓の外を見る。王宮はもう遠く離れて見えない。
そしてほんの半時間前の出来事を思い出して思わず顔を赤らめる。情熱的な告白とともにされた口づけは、思いだすだに身をよじりたくなる。
まだ信じられない。自分はもう皇太子の妃ではないのだ。今日はあの式典が終わったら晩餐会が予定されてたから、また着替えて・・・、などというそんな心配はなくなったのだ。
振動のないリフターの乗り心地のよさに身を預けると、ミオはうとうととしだした。
王宮では気を張って過ごしていたので眠れない日も多かった。
もう安心なんだ・・・。そう思うと自然と瞼が閉じ、深く意識が落ちていった。
「ミオ？」
レクセルがふと見遣ると彼女は眠っていた。

無理もない、慣れない王宮の生活は苦しかったろう・・・。煌びやかに見える王宮の中は決して安楽なものなどではない。まして異星から連れて来られた少女にとってどれだけ負担だったことか・・・。

しかし無防備な・・・。

まぁ、いいか。これから先ミオの寝顔など他の男に見させはしない。

すると妹のナータから連絡が来た。

「なんだ？・・・は？ミオのサイズ？知るかそんなの。・・・。今寝てるし。・・・触っ・・・んなことできるかばかっ！・・・、まだ触ってない！・・・、うるさい、何でもいい、用意しろ」

まったくあの妹は・・・。

大きな声を出したから起きやしないかと思って後ろを見たが、よく寝ていた。

まだ・・・触れない。

レクセルは彼女を自分の部屋に呼び出し、その後に彼女が敵の手に落ちてしまったことをひどく後悔していた。

だから、触れない。

ミオは帝国の救国の女神と呼ばれてる。そんな彼女に彼女の同意なく手を出そうとしたから神の罰が下ったのだ。そうとしか思えない。

だから安易に手を出すのはやめようと思ってる。

まして眠ってるミオの胸を触ってそのサイズを推し測ろうだなんて、そんなことをしたら自動安全制御装置がしっかりとついているリフターだとしても絶対事故るに違いない。

レクセルはしっかりと制御装置を握り直して前に集中した。

君とともに2

「ミオ、着いたぞ。起きてくれ」
ミオは肩口を軽く揺さぶられ、目を覚ました。レクセルがリフターのドアを開けて手を差し出している。
「ここは？」
「俺が今住んでるマンションの地下駐車場、さぁ」
レクセルの、マンション・・・。
促されてその手につかまりリフターを降りる。
広い。それに地下だというのにどこも寂しさを感じさせないほど明るい。停められているリフターもどれも高級品ばかりのようだ。
「こっちへ」
手招きされるままにエレベーターの前に立つ。やがてエレベーターが降りてきて扉が開き、その中に足を踏み入れる。
「何か、ホテルみたいなところ・・・」
落ち着かなさに思った事がそのまま口に出る。上昇するエレベーターとともに緊張も高まる。だってこれから行くのってレクセルの部屋なんだよね・・・。
「ああ、まぁね。でもそんなに大したところじゃないよ」
こんな毛足の長いふかふかの絨毯を使うエレベーターを使うところが大したところじゃないなんて。
レクセルが次期伯爵様で、けっこうなお金持ちだとは知ってる。この国には身分や階級があり、彼ら特権階級は下々《しもじも》の者には想像つかないほどの経済力を持っている・・・らしい。
本格的に教えられたわけじゃないので詳しいことは分からない。けれどこの世界はそういう所らしいのだ。
やがて目当ての階に着いたのかチンと音がして扉が開く。広めの空間にドアが一つ。共用とか、そういうことはないらしい。
「さぁ、入って」

「お、お邪魔します」
部屋に入るとすぐ目の前に広いリビング、窓は総ガラス張りになっていて、そこから地平線、というか防御壁に落ちる夕焼けが見えた。防御壁とはこの帝都を守る幾重にも障壁を展開したシールドの基底部分。防御壁は帝都をぐるりと囲んでいる。
夕焼けが見たくて思わず窓に走り寄る。
すると後ろから笑い声が聞こえた。
振り返るとレクセルがおかしそうに笑っている。
「いや、ごめん。景色が好きかい？宇宙を見せた時も同じだったと思って」
「うん・・・」
「じゃあこの部屋でよかった。研究所から遠いしあまり好きじゃなかったけど、君が気に入るなら」
「研究所？」
「ああ、今働いているところだ」
レクセルはそう言って他の部屋へ続く扉を開けた。
「着替えてくる。君の着替えは妹に頼んでおいたから、それまで待ってて欲しい」
「うん」
ぱたんと扉が閉じられると窓からの眺望に目を戻した。
ふと力が抜けてぺたりと座りこむ。それからころりと横になった。
王宮ではこんなことできなかったな・・・。レクセルもだめって言うかな？でも優しいからそんなこと言わないよね。
横になって眺める景色がおもしろくてずっと見ていたら、
「お、おい、どうした！？ミオ！？」
着替え終わったレクセルが慌てた様子で駆け寄ってきた。起き上がる間もなく彼に抱き起こされ顔を覗き込まれる。
「あ、ご、ごめんなさい、なんでもないの。疲れちゃってて・・・」
「そうか・・・、何かあったんじゃないかと・・・。俺、君がいないと本当だめなんだよ・・・」

泣きそうな顔で言われた。
「レクセル・・・」
「俺が君のことどれくらい想ってるかなんて知らないんだろう？君がいなくなったらと思うだけで俺は心臓が止まりそうになる」
レクセルはミオを胸に抱く。
「ずっと側にいて欲しい・・・。ミオ・・・」
耳元で囁くように言われ、ミオの鼓動は聞こえるんじゃないかと思うほど大きく激しく鳴り、顔は火がついたように熱くなった。
「や・・・」
レクセルの唇が耳から首筋へ落とされ、さらに下へすべるように動く。
「ちょ・・・まっ・・・」

ピンポーン

レクセルの唇が胸元へ滑り降りる前に玄関のチャイムが高らかに鳴った。そして少しいらだったような顔をしてミオを離し、玄関へと向かった。
た、助かった・・・？
ミオはドキドキする胸を押さえて立ち上がった。

全く、自分がこんな意志薄弱だとは思わなかった。男と言うのは本当にどうしようもない生き物らしい。
先ほどの誓いを、あっさりと破り捨てた自分の言動に自分が情けない。
レクセルは苛立ちを押さえて玄関の扉を開ける。
「やっほー、兄さん久しぶり」
玄関には大きな袋を抱えた妹、ナータが立っていた。髪を金色に染めている。自分の妹なのになんでこんなに派手好きなのか。
「あっれー、お邪魔だった？」

疲れたような顔をした兄と、所在なげにたたずむミオを見てからかうように言う。
「そんなことない。さぁ、入れ」
「はーい。あ、兄さん約束守ってよね」
「分かってる。バッグだな」
ナータとはミオの買い物をしてもらう代わりに流行りのバッグを買ってやることになっていた。
「毎度あり。あ、あの子ね、初めまして！うっわー、すごい、お姫様みたい！」
ナータは感嘆の声を上げてミオに走り寄った。式典のままの衣装なので傍から見ればそうなるだろう。
「初めまして」
ミオは膝を少し曲げて頭を下げる帝国式の礼をする。
「うわっ、何その完璧なマナー！はー、さすが王宮にいただけはあるのね」
「あ、違う？ごめんなさい、あまりこちらの普通が分からなくて・・・、初対面のあいさつはこうだって聞いてたから・・・」
「んーん、全然！こっちが見習わないといけないくらい」
「そうだな」
「兄さんは何も言わないで」
「・・・」
「それにしても・・・。これすごいわねー」
ナータがミオの首に巻かれたネックレスを手に取りしげしげと眺める。
「真珠（ラッグル）だわ！４連もある！すっごいわねー。さすがだわ・・・。しかもここについてるこれ、ピンクダイヤモンド（レフィスト）じゃない！？イヤリングも！それにこの髪飾り、いったいいくつダイヤ（フィスト）がついてるの！？」
ミオに身につけられたアクセサリーを一つ一つつぶさに見る。
ミオにはこれらがどれくらい価値があるのか分からないんだろう

な。きょとんとした目で大騒ぎするナータを見ている。
「うっわー、何で兄さんとこなんかに戻ってきちゃったのよ。兄さんの稼ぎじゃこんなの一生かかったってもう身につけさせてもらえないわよ」
「悪かったな。ミオの着替え買ってきてくれたんだろ？早く替えさせてやってくれ。彼女疲れてるんだから」
「はーい。どの部屋使うのー？」
「そっちの奥を使ってくれ」
「分かった。さ、行きましょ」
二人はリビングから左奥の部屋に入った。

君とともに3

部屋は来客用のベッドルームになっていた。日本式で言うと１０畳くらいの部屋にきれいにベッドメイクされたベッドが二つ。他に目を引くものはない。

一人暮らしなのにさすがと言うかなんというか。

「全く、いい暮らししてるわよね。ここ、兄さんが帝都勤務になったって時にどっかからもらったって言ってたわ。私なんか普通の賃貸なのに」

同じことをナータさんも考えていたようだ。

しかしこんな超高級そうなマンションをぽんとくれる人がいるなんてやっぱりさすがと言うか・・・。

「さ、脱いで脱いで」

ナータは袋を床に放り出すとミオの後ろのホックをはずしにかかった。

「じ、自分でできます～」

「いいから、いいから。ほいっと」

あっという間に剥かれてしまった・・・。

「細いわねー。ごはんちゃんと食べてる？でもこんなんつけてたら食べれないか」

体型をよく見せるためのコルセットを外しにかかる。それを脱ぐとやっとほっとした。

「へー。見た目よりけっこうあるのね」

「は・・・わわ」

ミオは慌てて胸を押さえた。

「なーによー、女同士なんだからいいじゃない。ちょっと触っていい？」

「え！？」

言うやいなやナータは後ろからミオの胸をわしづかむ。

「え、ちょ・・・いや・・・、やめ・・・」
ちょっとどころではなく胸をもみしだくようにされる。
「あ・・・ふ・・・んん」
「かーわいー。こんなことで陥落寸前なんて、処女は初々しくていいわー」
「やめ・・・もう・・・」
「うーん、Bってとこかな。やっぱりいくつか買っといてよかった」
そう言うとぱっと手を放し、袋から色とりどりの下着を取りだした。
なんだ、サイズ測ってたのか・・・。でももうちょっとお手柔らかにしてほしかった・・・。
袋からはレースや細い紐のついたブラやショーツががひらひらと舞い出てきた。
「は、派手じゃない？」
ミオはその一つを取ってまじまじと見る。それは薄紫の光沢のある素材のショーツで黒い紐がついてた。
「それなかなかいいでしょ？でもミオちゃんにはやっぱり白よねー」
と純白のレースが見事なブラとショーツを手に取る。
「ちょっと着けてみてよ」
「う、うん・・・」
ミオは言われるままに身につける。
「ちょっと大きいかも」
寄せてあげてみてもどうにもカップが合わない。
「うん、似合う！ま、いいんじゃない、どうせすぐ脱がされちゃうもんだし」
「脱が・・・」
「きゃはは。そんなに赤くならなくてもー。これで兄さんもいちころよ！」
「そ、そんな・・・・」
ミオは赤くなって顔を隠す。

「ね、上はこれ着てみてよ。今流行りなの」
がさごそと違う袋をさぐってナータが見せたのはシャツワンピースのような、だが生地が厚く、大きなボタンが特徴的な服だった。これも言われるまま身につける。これはきちんとサイズが合っていた。
「わー、かわいいっ、やっぱりよく似合う！私こんな妹欲しかったんだよね！仲良くしましょうね」
「はい」
「かわいいー！」
ぎゅっと抱きしめられる。感情が高ぶるとこの家系は抱きしめる癖があるんだろうか・・・。
「兄さん、着替えすんだよ。ねぇ、夕食は一緒に食べてっていい？兄さんのおごりで」
ナータはミオを着替えさせ終わるとリビングへ出ていく。
「あれ、兄さん顔赤くない？ははーん、さては盗み聞きしてたな、このどすけべー」
「大声でしゃべるからだろっ。全くはしたない・・・」
「兄さんってば意外と純情～。ねぇ、私２０でおばさんになりたくなんかないから避妊だけは気をつけてよね」
「な・・・、そ、そんなことお前に言われなくても分かってる！」
「だって。ミオちゃん、兄さんがゴム付けてなかったらちゃんと言うのよ」
ナータは振り返ってミオに言う。
「・・・」
ミオは何も言えず立ちつくす。そんなこと言われても無理である。だいたい本当に本当に何の経験もないのだから。
「で、兄さん今日の夕食なんだけど」
「ああ、いいぞ。下にあるレストランでいいな」
「ごちそーさまー」

ナータさんは食べ終わると用は済んだとばかり席を立ちあがった。
「もう帰るのか？」
「うん、明日も大学あるし」
「気をつけてな」
「じゃね、ミオちゃん。何かあったら呼んでいいよ。連絡いつでも入れて」
ひらひらと手を振って去っていく。
よくしゃべるナータさんがいなくなると、とたんに席はしんとしてしまった。
「俺達も戻ろう」
「う、うん・・・」
促されて席を立つ。ここからはレクセルと二人きりなんだ・・・。
そう思うと自然どきどきと心臓が高鳴りだした。
何かしゃべらなくては、と思う。でも何も思い浮かばなくて結局部屋までずっと黙りこんでしまった。意識したくなくても意識してしまう。
だって、だって・・・。
「そんな警戒しないでくれ。すぐどうこうしようと思ってないから・・・」
部屋に入るとすぐに、後ろから低い声で言われた。
ミオはびくっとして立ちすくむ。
「わ、ごめん！俺そんなに節操なしに見えるかい？」
レクセルはミオから2、3歩距離をとってついでに手をあげた。
「そ、そんなことないけど・・・」
とは言うものの警戒心は薄れない。別に嫌なわけじゃない、わけじゃないが心の準備ができていない。
「ナータの言ったことは気にしないでくれ。あいつはませすぎてるんだ」
言いつつレクセルの顔は赤くなっていく。
「本当？」

「ああ。ナータの言う通り、あいつをまだおばさんにはしたくないからな」
「何にもしない？」
「ああ」
「えへ、よかった」
ミオは壊顔してレクセルに抱きついた。本当はずっとずっとこうしたかった。でも男の人に無警戒に抱きつくのはさすがにためらわれた。けど、何もしないって言うなら・・・。
「ミ、ミオ・・・」
だがミオはお腹の辺りにあたる奇妙な違和感にすぐ身を離した。
「きゃあああああ」
「うわっ、ごめん、こ、これは、違うんだっ！」
レクセルの叫びも虚しく、ミオは脱兎の勢いで着替えをした部屋へ駆け込むとがちゃりと鍵をかけた。
「ミオ、ごめんっ。驚かせて・・・」
「き、今日はもう休むね、お休みなさい！」
「あ、うん、おやすみ・・・」
心なしか元気のない声が聞こえ、足音が遠ざかっていった。
びっくりした、びっくりした、びっくりしたー。
いまだ残るお腹あたりの奇妙な違和感。あれって、あれって・・・。
ミオはベッドに体を投げ出すとぎゅっと目を閉じた。
だよね、そうだよね・・・。男の人だもん・・・。
逃げちゃったりして、傷つけちゃったかな・・・。でもびっくりしたんだもん・・・。
ミオはベッドに潜り込むと、疲れもあってすぐにウトウトとなり、眠りについた。

君とともに４

ふっと目が覚めると、窓からは燦々と陽光が降り注いでいた。
い、今何時！？
がばっとはね起きて、いつもの部屋ではないことに気づいて気が抜けた。
ここは、王宮じゃない・・・。
あんな場所でもすっかりと慣れてしまっているんだなぁと変な感慨を抱いて床に足を付ける。
ああ、服が昨日のまんま・・・。
ナータさんがいろいろ買ってきておいてあるんだよね。
床に乱雑に置かれた袋をひっくり返して中身を確かめる。
下着に、パジャマもある。服も色々と入っていた。
その中から適当に選んで手に持つ。
お風呂に入りたい。その時に着替えよう。
レクセルは起きてるのかな・・・？
寝る前にかけてしまった鍵を開け、ゆっくりと扉を開く。リビングには誰もいなかった。
机の上にメモがあるのを見つけた。
が・・・。読めない。
話すのはなんとかなったけど、さすがに文字はまだ・・・。
まぁ、読めないものは仕方ない。メモがあるってことはレクセルはきっと出掛けてるんだよね。
お風呂は勝手に借りちゃおう。どこかな？
玄関から左手、手前奥がサニタリールームになっていた。
うわー、ここも広い・・・。まぁ、王宮ほどじゃないけど・・・。
あそこは別格だよね。
服を脱いでバスルームへの扉を開けると温かい空気を感じた。浴槽には湯が張られ、湯気を立てていた。

よかった。やっぱりシャワーだけだと嫌だよね。わざわざこうしておいてくれたんだろうか、それとも常時こんななのかな？まぁ、どっちでもいいか。
ゆっくりゆっくり湯船に浸かって疲れを癒す。一人でお風呂に入るの久し振りだ。王宮は侍女さんたちと一緒だもんね。いいって言っても全然聞いてくれなかったし。でも湯上りのオイルマッサージがなくなっちゃうのはちょっと淋しいかな。あれだけは気持ちよかったなー。
お湯をたっぷりと堪能してからミオは浴槽を出た。

たぶん最悪のタイミングでこの扉を開けてしまったんだと思う。
仕事は無理を言って今日は休みにしてもらった。ミオを一人置いておくなんてできない。だけど彼女は疲れているのか起きてくる気配が全くない。
持て余した時間を有効に利用するため、マンションの設備のジムを利用することを思いついた。１時間ほどマシーンで体を鍛え汗をかいた。が、ジムに付属するシャワールームは使わずに自分の部屋のでと思って、ついというかうっかりというか、とにかく何も考えず玄関から真っ直ぐバスルームに向かった。
「ごめん・・・」
それだけ言うのが精一杯で、ぱたんと扉を閉めた。瞼の裏には湯に温まってほんのすこし上気してうす桃色の半裸のミオの姿が焼き付いていた。
これは何ていう試練なんだろう・・・。
婚前交渉はしないと、昨日自分自身に誓ったはずだった。それに彼女はまだ１６、いや、１７になったんだっけ。とにかくまだ早い。だめだ。
そう思いつつも下肢に集まる血の奔流を押さえることはできそうにない。全く中坊かよ・・・。

しばらくすると遠慮がちにサニタリールームの扉が開いた。
「ごめん！わざとじゃないんだ！いつもの癖というか、いるとは思わなくて・・・」
土下座して出迎えた。
「あの、私のほうこそごめんなさい。起きるの遅くて・・・、勝手にお風呂も使っちゃって・・・」
「そんなのいいんだよ。俺が気を付けてればよかったんだ」
「あ、あの、こっちに用があったんだよね。ごめんなさい。どうぞ、使って」
「あ、ああ、うん・・・」
勃起した下半身に気をつけて移動する。気付かれないように。昨日はそれで驚かせてせっかくの彼女からの抱擁を台無しにしてしまった・・・。早く冷たいシャワーを浴びたい・・・。

「昨日の今日で申し訳ないんだが」
ミオにブランチをふるまいながら話をした。ブランチと言っても自分は料理は全く駄目なので、レトルトものを温めたものだが。それでもミオは嫌な顔一つしないでおいしそうに食べてくれる。いい子だよなぁ。優しいしかわいいし・・・。
「・・・それで？」
つい見とれてしまっていた・・・。
「あ、ごめん！で、その、なんだ。この家に二人きりというのはやはり良くないと思うんだ」
「う、うん・・・」
「だから俺の両親のいる惑星へ移ってもらいたいと思う」
「レクセルの、ご両親のところへ？」
「そう。いいだろうか？そこなら俺の父さんと母さんがいるし、寂しくないと思う。学校に通ったっていいと思うんだ」
「学校！？」
「どうだろう？まだ文字が読めないと言ってたね。帝国語を教える

学校ならたくさんあるし、それよりまずこの国に慣れて欲しい」
「う、うん」
「急いだり、無理はしなくていい。君のためになることなら何だってしてやるつもりだ。何かしたいことはないか？」
ミオは少し逡巡して、レクセルを見つめると言った。
「レクセルと一緒にいたい・・・」
真摯な眼差しに胸が熱くなる。
レクセルはたまらずミオを抱きしめた。
「そんなかわいいこと言うと本気で襲うぞ、こら」
「そ、それはちょっと・・・」
レクセルはミオの顎を掴むと上を向かせてキスをする。
「え・・・？んん・・・ふ・・・」
ミオの甘い声に軽い痺れが脳に走ると、さらなる欲望が這い出てくる。
「んっ・・・！？」
ミオの咥内に舌を侵入させた。驚いたミオが腕をつっぱって逃れようとする。だがそんな抵抗はないに等しい。彼女の後頭部をしっかりと押さえて深く深くキスを続ける。
「ふぁ・・・はぁ・・・」
深く長い口付けを終えてミオを放す。初めての経験にぐったりとして椅子に背を預けて空気を吸いこんでいる。その様子にもう一度したくなったがさすがにやめた。
「まぁ、こういうわけで俺のそばにいるのは君のためにならない。2時の便でここを発つ」
ミオはこくりとうなづいた。

君とともに5

恒星間を移動する大型旅客宇宙船。いわゆる金持ち用豪華客船。一般の宇宙船に比べサービスの質も設備も格段に違う。もちろん値段も。自分だけの時ならそう利用はしなかったが、今回はミオがいる。

「どうぞ、こちらでございます」

「ありがとう」

客室乗務員に部屋に案内されると、ミオは真っ先に窓辺に駆け寄っていった。

「相変わらず外を見るのが好きだな」

ソファーに座りながらレクセルは窓に張り付いているミオを見てクックと喉を鳴らして笑った。

「だって好きなんだもん・・・」

笑われたことが恥ずかしくなったのか窓を離れてレクセルの隣に座る。

恒星間を旅行する宇宙船の最上級の船室のソファーはクッションがききすぎるほどふかふかとしていて、座った途端にミオは沈み込んだ。

「わぁっ」

「・・・っく」

「笑っちゃだめぇっ」

「ご、ごめ・・・くくっ」

笑いをこらえながらじたばたとするミオを助け起こす。

「もう、こんなにいい部屋じゃなくていいのに」

「君はすぐ自分の立場を忘れる。救国の女神さま」

「あ・・・」

ミオは下手に顔が知られすぎているから外を歩く時は気をつけなくてはならない。だから無用なトラブルを避けるには隔離するに限

る。
「別に外を見ててもいいんだぞ」
そう言いつつミオを引き寄せた。ミオも甘えたように頬を摺り寄せてくる。
ほんわかとした幸せ感が、じんわりと胸にしみた。
ああ、でもこの幸せも１８時間後に終わってしまうのか・・・。
レクセルの領地でもあるオードヴェル領は幸いなことに帝星と直通の亜空間航路が開かれており、大した時間を費やさずに移動できる。
しかしこれからミオに会おうと思ったらこの距離を移動しなければいけないのか。皇子の持ってるような自前でワープ航行できる船があればいいが、あれはバカ高い上に個人が所有できるようなものじゃない。戦略上勝手にワープされたらたまったもんじゃないからな。まぁ、そんな技術も金も帝国が厳しく管理してるから滅多なことは起こったことはないが。
「・・・１８時間が短いだなんて思ったは初めてだ」
「本当。きっとあっという間だろうね」
「ああ」
「・・・どうして、レクセルとずっと一緒にいちゃいけないの？」
胸に顔を埋めたミオが切なそうに聞いてくる。
「私は・・・別に・・・」
目の前の食べものを食べないのは男としてなんとかという言葉もあるにはある。あるんだが・・・。
ミオの肩を持って胸から放して彼女を見て言う。
「いや、その・・・なんというか、そ、そう言ってくれる君の気持ちは嬉しい。けど、それだけじゃないんだ。俺だって君と一緒にいたい。だが主星といえど何があるか分からない。そこに不慣れな君を一人置いておきたくないんだ」
それでもミオは納得いかないといった表情だ。
「でも君がもっとここに慣れて一人で生活できるくらいになったな

ら、俺も安心して主星に呼べると思う」
　ミオの顔が輝いた。
「そうだな、やっぱり文字を読めるように、あと買い物とかできるようにならないとな。習慣や文化なんかも知っていかないと・・・」
「うん、頑張る」
　言い終わらないうちに笑顔で宣言するミオ。本当嫌がったり、弱音吐いたりしないよな。
「ああ、頑張れよ」
　そのおでこにキスをしてやった。照れたのか顔を真っ赤に染めると立ち上がってまた窓辺に行ってしまった。それを掴まえようとして空振ってしまった。
　逃げられるとつい追いたくなるのが男の性で・・・。
「ミオ・・・」
「どうし・・・ん！」
　後ろから掴まえて首を無理にひねらせて唇を塞ぐ。
「この航海が終わったら君にしばらく会えないだなんて・・・。仕方ないのは分かってるけど、だから、少しでも近くにいたい・・・」
「レクセル・・・」
　１８時間はほんと、あっという間だった。

銀の人1

惑星オー。帝国主星と亜空間航路が繋がれた、帝国の信厚いハユテル家が治める空域の中心星。
帝国でも少ない天然自然のハビタブルプラネット。深く青い色の海を擁し、乱開発を嫌った歴代当主達が自然をそのままに残し、風光明媚な惑星として知られていた。
その一画。惑星の首都から少し離れた郊外にレクセルの「家」というのはあった。
最初は遠いからよく分からなかったけど、だんだんと近づいてくるとその大きさに目を見張る。
「家」なんて言うのは似つかわしくない。いうなればお屋敷、いや、お城?。
周囲見渡す限りには他の建造物なんて見当たらない。だからあれがレクセルの家なんだって分かる、分かるんだけど・・・。
「あれ、本当に家?」
そう呟くのが精一杯だった。
やがて高い鉄製の塀に辿り着き、大きな門扉がガラガラと重い音を立てて開いていった。レクセルはリフターを門の中に乗り入れる。そして真っ直ぐに続く道。その先にレクセルの「家」がその全容をようやく現す。
「そんな呆けた顔してるんじゃない。今日からあそこが君の家なんだぞ」
言われたって実感がわかない。王宮には住んでいたけど、自分の中での家の基準というのはあくまで地球の日本の我が家、２階建て４ＬＤＫ。
ここはどんなもんなんだろう・・・、嫌だ数えたくない・・・。
近づいてくる大きな大きな建造物。煉瓦調の外壁はどっしりとした重厚感がある。三角屋根はかわいらしいが黒い色が威圧感を醸し

出している。さすが軍人の家系のお家だけあるなぁ。
玄関の前には人が出迎えに出てきていた。
「父さんと母さんだ」
「ええっ！？」
いきなりレクセルのご両親とご対面なんて・・・。
「大丈夫。とって食ったりしない」
「緊張する・・・」
「平気だって」
レクセルは可笑しそうにくすくすと笑っていた。
「ドアは召使いが開けてくれるからね」
リフターが止まり、自分で開けようとしていてすぐに見とがめられた。
そ、そうだね。思い出すのよ、私はこの国の皇太子妃だったんだから。
自分自身を鼓舞して開けられたドアからまず手を差し出し、外で待機している人の手に掴まってゆっくりとした所作で降りる。優雅に、優雅に・・・。
「よくいらっしゃいました」
優しそうな笑顔の少し太った女性が口を開く。レクセルのお母さんだっ！
「初めてお目にかかります。サハラミオです」
スカートをつまんで、ってスカートがないやっ。うー、まぁいい、形だけで・・・。膝を少し曲げて頭を下げる。よし、完璧。マナー叩きこまれておいてよかったー。
「まー、ずいぶんしっかりしてらっしゃるのね。見習わなきゃー」
あれ、どっかで聞いたような。そうか、ナータさんのお母さんでもあるわけだから・・・。
「ほう、これが噂の救国の女神か」
低く落ち着いた声が頭上から降り注ぐ。同じように礼をしてから目を上げる。

レクセルと同じブルーブラックの髪、少し白髪が交じり、口ひげを蓄えている中年の男性。
レクセルにそっくりだった。
ミオは目をぱちくりとさせて見た。
「どうしたね？私の顔に何か付いているかね？」
「いいえ、私、レクセルのお父さんはとっても厳しい方だって聞いていたんです」
まだ戦艦に乗っていた時、レクセルから運動と称して体を鍛えるための訓練を課されたことがある。すっごく厳しかったけど、レクセルの友達のヒーズという人が教えてくれたことがある。レクセルの父親はとても厳格な人だって。
「だからどんな怖い人なんだろうって思ってました。でもレクセルにとても似ているので安心したんです」
「ほぉ、私の顔を見て安心とな」
レクセルのお父さんは笑った。
「ええ、レクセルに似ているならきっと優しい人なんだろうって」
「はっはっは！優しいとな？レクセルが？おい息子よ、さすがのお前も好いた女には優しくしたんだな！」
「いーえー、レクセルはもとから優しい子でしたよ」
「父さん、母さん・・・」
レクセルは困ったように額を手で押さえていた。
「さぁ、長旅疲れたでしょう。中に入って」
「はい」
中に一歩入るとそこは別世界。天井の高さとか、基準はきっと自分と違うんだよね。広々とした玄関ホール、天井からはガラスの大きなシャンデリアが吊り下げられ、まるで映画のような湾曲した二対の階段が2階へとつながっている。
「お待ちしておりました」
そのホールには一人の青年が立っていた。ミオに向かって深々と頭を下げると、銀色の髪がさらりと肩から落ちる。

きれいな男の人・・・。ミオは息を呑んだ。端正な顔立ち、美しい青い瞳、ほっそりとした均整のとれた体躯。
ミオは慌てて礼をする。
「ミオ、こいつはうちの家令だ。礼は必要ない」
少し苛立ったような声でレクセルから是正された。
「美しい若者だろう？我が家自慢の人工生体機械体の疑似人格付き執事、エリクスだ」
レクセルのお父さんが自慢げに紹介するが、
「え・・・と・・・？」
たくさん並べられた難しい言葉に頭がついていかない。
「いわゆる人型機械（ロボット）さ」
レクセルが注釈を入れてくれた。
「ロボット！？本当に！？」
まぁ、これだけ科学が発達している帝国だもの。いないわけないよね。でも、でも・・・。
「人間にしかみえない・・・」
確かによーく見るとどこか機械的な感じがする。血の通ってないかのような白い肌、どこか違和感のある表情。でもほとんど見分けなんかつかない。
「・・・触っても、いい？」
どうしても機械なのか確かめたくてレクセルに確認をとってみる。
「ああ」
二つ返事で了解される。
「ええっと・・・」
「エリクスでございます」
「エリクスさん・・・」
「呼び捨てで結構です」
「じゃあ、エリクス、ちょっとだけ・・・」
「はい」
恐る恐るその頬に触れる。温かい。人間の体温を真似ているんだ

ろうか。瞳を覗き込むとその奥に燐光がパルスのように閃く。本当に機械の目だ・・・。
ふいに心音が聞きたくなってその胸に片耳をつける。・・・やはり心音はしない。
「ミ、ミオ、あー、一応そいつも男なんだが・・・」
こほんと咳払いをされた。
「でも機械でしょう？」
振り返って発した言葉によってその場に流れた悲しい空気は、地球とは違う概念を発達させたこの世界の人々との隔たりをミオに痛感させたのだった。

銀の人2

「ミオ、君はまだこの帝国に来て日が浅いし、彼ら『レリフェル』（銀の人）のことも知らないだろうから仕方ないかもしれないけど、どうか彼らをただの『機械』だなんて思わないでほしい」

レクセルの表情は優しく笑っていたが、その奥に怒りとも悲しみとも言えない複雑な感情が隠されたいるのが見て取れた。

「『銀の人（レリフェル）』・・・」

ミオはエリクスから離れてうろたえた。どう接したらいいんだろう・・・。

「いいえ、知らないのなら仕方ありません。しかし面と向かって『機械でしょう？』なんて言われたのは何百年ぶりでしょう」

エリクスは怒ることもなく柔和な笑顔を浮かべた。

「さすが何百年も生きているだけあるな。お前なんかより何倍も感情のコントロールがエリクスはできておる」

レクセルの父親がレクセルの背中をバンと叩く。

「一緒にしないでくれ・・・。レリフェルはもう人類なんかとっくに追い越してるんだから」

「そんなことありませんよ、人間より少々長生きなので世長けているだけです。私達は決して人を超えることはできません」

その言葉の中にもやはり何の感情も含まれてはいない。人を模しただけの機械だからこその表情だからなのか、それとも上手く隠しているだけなのかミオには判別できなかった。

「ミオ、これからのことは全てエリクスに聞くといい。エリクス、用意はできているのか？」

「もちろんでございます」

「うん、さすがだな。無理を言ってすまない。急なことで大変だっただろう」

「いいえ。未来の奥方様に失礼があってはなりませんから」

「み、未来の・・・」
ミオは顔を赤くする。
その様子にレクセルの父親がレクセルに耳打ちした。
「まだ手は出してないのか」
レクセルは無言で父親の後頭部を殴った。
「お前、親に向かってなんてことをするんだ」
「その問題は今言うことじゃないだろう。ミオの前では特にやめてくれ」
「何を恥ずかしがって・・・」
声を大きくした父にレクセルは首をホールドしにかかる。
が、父親はその手をあっさり掴まえて捻りを入れる。
「はっはっは、まだまだ若造には負けんよ」
「このっ・・・」
「もう、何をふざけてるの、二人とも」
「レ、レクセル・・・？」
「ミオ、エリクスに部屋まで案内してもらえ、俺は親父と少し話がある」
二人はがっちりと組んだまま、レクセルが顔に笑顔だけ浮かべてミオを促す。
「う、うん・・・」
「ではこちらへ、ミオお譲さま」
「お、お譲さま！？」
「まだ奥方と呼ぶには早いようですので・・・。いけませんか？」
そ、そうだけど、でもなんかむずがゆい・・・。だからといって奥さんだなんてのはもっと困る。
「好きに呼ばせてやればいいさ。エリクスの選んだ呼び名なら、間違いだけはないから」
ミオは言われたことにこくりとうなづく。いいよね、呼び方なんてなんでも。
「ではこちらへお譲さま」

でも、うーん、なんだかな・・・。

「お部屋は3階にご用意いたしました。1階は共用部分が多く、2階がオードヴェル伯爵夫妻が、3階にはレクセル様とナータ様の私室がありますので。・・・こちらです」

2階、3階と順に階段を上ってきて、広くて長い廊下の突き当たり。重そうな扉を開けると白い壁と大きな窓が目に飛び込んできた。天井まであり、上部はアーチ型。小花柄の青いカーテンが下がり、その窓からは遠くの景色まで一望できた。

「外を眺めるのがお好きだと聞きましたので窓の多い角部屋をご用意させていただきました。不都合があればなんなりと言って下さい」

ミオはふるふると首を振った。

「不都合なんてないよ。すっごく素敵なお部屋。ありがとう」

「お礼はレクセル様に」

「・・・っそうか。でもありがとう」

召使いに馴れ馴れしくしてはいけないと王宮でも言われたっけ。

「・・・いえ」

エリクスはそれでも少し照れたように返事した。

「本当に人間っぽいね。すごいなー」

何気なく言ったつもりだったが、すぐにそれはタブーだったと気付いて口を塞ぐ。

「ごごごめんなさい。人間じゃないって思っちゃいけないんだよね、えっと・・・」

エリクスはその様子に微笑を浮かべた。

「私達のことをお話しした方がいいようですね。今はもう私達のことを敢えて話すこともないくらい当たり前になっているから、皆説明を怠っているようです」

「う、うん・・・」

「お座りになってお待ち下さい。お茶を用意しましょう」

「ありがとう」

銀の人3

「レリフェルは第二の人間と言われるほど、完璧に人間を模そうとして作られた存在でした」
エリクスは優雅な手つきで薫茶と呼ばれる紅茶のようなお茶をカップに注ぎながら話しだす。
「そしてレリフェル達は人にあまりに似過ぎたために自ら壊れていった歴史があります」
ミオは神妙な顔つきで耳を傾けた。
「美しい容姿、決して衰えない肉体、優れた頭脳。もはや人を超えた存在としてもてはやされた時期もありましたが、ただ一つレリフェル達に出来ないことがありました」
エリクスは窓の外を見つめて陽光に目を細めた。
「何？」
「人を愛することです」
ミオはきょとんとするばかりだった。
そんなミオにエリクスは冷たい眼差しを向けた。
「人を愛するということは疑いも抱かないほど、人にとっては当たり前のことですか？」
優しい笑顔の裏には寂しさが隠れている表情だった。怒りにも似た情動。
「え・・・。そんな深く考えたこともないし・・・」
「ああ、まだお若いからでしょうね。失礼しました」
「う、ううん。別に大丈夫」
「とにかく、レリフェルを作った研究者達はより一層人に近づけようとレリフェル達に愛するということをプログラムしました」
「うん」
「ところがそのプログラムはうまく働きませんでした。結果、レリフェル達に深刻なエラーが生じ、プログラムは破壊され、レリフェ

ル達の死、つまりシステム起動不能という事態が起こってしまったのです」
「・・・人を愛すると壊れてしまうの？」
「その通りです。お譲さまは飲み込みが早い。そう、レリフェル達は人を愛そうとした。だが愛するほどに矛盾が彼らを蝕んでいった。愛しても愛しても、人はやがて死を迎えてどこかへと旅立ってしまう。レリフェル達はただ取り残されてその喪失に絶望する。愛の結晶と呼ばれる子供を授かることでもできたなら、あるいは話は違ったかもしれませんが、レリフェルには生殖能力がありません。永遠の時を生きられる私達はただ雪のように降り積もるだけの多くの愛する人の死に耐えきれなくなり、やがて死を欲するようになりました。そして実際に多くのレリフェル達が死んでいきました・・・。しかも研究者達がどれほど止めようとしても、そのエラーは直ることはありませんでした」
「レリフェルは人を愛してはいけないの？」
「結果そういうことになりました。人を愛してはいけないと」
「愛したいのに？」
「はい」
ミオは王宮にいた頃を思い出してたまらなくなって泣き出した。
「ど、どうされたのですか！？お譲さま！」
「だって、だって分かるもの、よく分かるもの。私、レクセルはきっと愛しちゃいけないって思ったの。でも無理だったの。あんな辛いこと他にない。それが永遠だなんて・・・」
「お譲さま・・・」
エリクスはハンカチを取り出してミオの涙を拭った。
「人も同じなんですね。・・・でも人はいつかそれを忘れることができる。レリフェルの複雑な記憶回路はそんなふうに忘れることができない。人は本当に人を愛するために生まれてきたと痛感します」
「でも人は人を愛することもできるけど、人を憎むこともできるものよ。レリフェルはどうなの？」

「そうですね、それがやはり徒となってしまっているのでしょうね。私達は人を憎むようにはつくられていない。愛するだけでは人にはなれないのです・・・。そしてこれが人の作る機械の限界でした」
「・・・それでどうなったの？」
「レリフェルは人を愛してはいけない。また人もレリフェルに恋してはいけない、という決まりができました」
「人が、恋を・・・？」
「そう。多くの人たちがこの作られた美しい容姿に恋をしました。そして人生を狂わせ、レリフェルをも狂わせた。大きな社会問題となり、人はこう考え、こう教えるようになりました。レリフェルは人ではない、恋をしてはいけない、愛してはならない。愛を知ったレリフェルは愛を忘れることができないから。人の作ったものにはやはり人の側に責任を求めました。時々逸脱した人が現れますが、それは概ね守られ、せっかく大金を投じて作った貴重なレリフェルを壊すようなことは少なくなりました」
　エリクスはにっこりと笑った。それにつられてミオも笑う。
「ですからお譲さまも私に決して想いを抱かないように。お約束していただけますか？」
「でも、どうしたら・・・」
「そんなに難しく考えることはありません。使用人と同じに扱って下されば いいのです。人に似ているからと美しいからと不用意に近づかないこと、親しく言葉を交わさないこと。レリフェルはレリフェルと、割り切っていただけたらそれでよいのです」
「そう・・・」
「どうかそんな悲しい顔をなさらないで下さい。私達はあなた達のただの下僕なのです」
「こらエリクス、いつからお前はそんなに卑屈になったんだ」
　突然扉が開いてレクセルが現れた。
「レクセル様・・・」
　エリクスは慌てた様子でレクセルに向き直った。

「確かに間違っちゃいないが、レリフェルの尊厳はきちんと守られているはずだ」
「はい・・・」
「レリフェルに過剰な愛情を抱いてはいけないことになっている。それにレリフェルが人を愛してはいけないことになっているが、人がレリフェルを愛するのをやめてはいけないんだ。愛といっても愛情とは違う種類の愛だがな。これは簡単にできることじゃないが、レリフェルを持つ人間に課された義務だ。たまにはきちんと言ってやらないと、レリフェルでも忘れるらしいな」
　レクセルはエリクスの銀色の前髪を人差し指ですくって優しく笑った。
「・・・そうですね。少し古い記憶にアクセスしたのでプログラムに少々ゆらぎがでているようです。自己修復してまいります」
「ああ」
　エリクスは礼をすると下がっていった。
「難しいのね、レリフェルって・・・」
　ミオは机につっぷしてため息をついた。
「そうだな。でも最初はあいつが言ったように不用意に近づいたり話しかけないのが一番だ。ただあいつが下僕だなんて言い出すから・・・」
　レクセルは心底悔しそうに言った。
「・・・エリクスのこと相当気にかけてるのね」
「ああ。レリフェルはさすがだよ。下手な人間よりずっと人間らしい。それに絶対に裏切ったりしないし忠実で、本当に頼りになるし・・・ってなんだ？妬いてるのか」
　レクセルはミオの拗ねたような顔つきに気づいた。
「ち、違うもんっ。だってあんまり熱心だから・・・」
「そういうのを妬いてるっていうんだ。なんだ？相手が男で使用人でもやきもち焼くんだな。とすればずいぶんな・・・」
「そんなことないってば！」

「はいはい。でも一番はお前だからな」
それからレクセルはキスのシャワーをミオに気のゆくまで浴びせた。

従兄弟1

「本当にもう行っちゃうの？」
「お願いだから、そんなこと言わないでくれ・・・。行けなくなるじゃないか・・・」
時刻はもう夕暮れ。玄関前の広場にミオと家族が見送りに出てきていた。
早く主星に戻らないといけない。放り出してきた仕事がある。
ミオが胸の前まで近づいてきて不安そうな瞳で見上げられた。
ミオの前髪をかきあげる。その見上げる瞳を見ていると抱きしめたい衝動に駆られるが、親がいる手前だからこれ以上は・・・。
「早く行け、時間に間に合わなくなるぞ。この子のことはまかせておけ」
親父はそう言ってぽんとミオの肩に手を置いた。
「・・・あんまり必要以上にかわいがるなよ」
「何を言う、お前の嫁になるならこの子は私の娘。娘をかわいがって何が悪い」
さらにもう片方の手も肩に置く。
「ナータには厳しかっただろうがっ」
「あの子は私によく似ていい性格をしているからな。こんな娘が欲しかったんだ」
そう言って自分の方に引き寄せた。
「わっ」
このクソ親父・・・。握りこぶしを作って強く握りしめる。
「さぁ、ミオちゃん。私をお父さんと思っていいからね」
「いいんですか」
「ああ、もちろんだ」
ミオは嬉しそうに笑った。
なんであんなに仲良くなってるんだ。まぁ、ミオの方が懐いてる

から仕方ないが、その理由が俺に似ているからだし・・・。
拉致って帰りたいが、それができないからここに来たわけで・・・。

ジレンマを抱えながらも時間が本当にないので仕方なくリフターに乗り込んだ。
「何かあったらすぐ連絡するんだぞ。分からないことは全部エリクスにまかせるんだ。彼なら上手くやる」
エリクスは後ろに控えていて、言葉を受けてうなずいた。それを見て制御装置を作動させ、車体を浮かせて発車の準備をする。
「次はいつ帰ってくるの？」
ミオは親父の手を振り切って近づいてきた。よくやった。
窓に手をかけるから開けてやる。
「分からないが、なるべく早く。そんな顔するなって」
長い黒髪を指にからませて引っぱる。ミオは少し嫌そうな顔をしてリフターを離れた。
「じゃあな」
その頬に触れてから手を放し、制御装置の加速スイッチを押した。

行っちゃった・・・。
空を滑るリフターに音はない。ただ風の音が巻き上げるそれとともに残るだけ。
夕暮れのオレンジ色の光が寂しさを増して、長く伸びる影が心にも落ちる。
「中に入ろう。風が出てきた」
「はい、あの、おじ様！」
「おじ様、か。ミオちゃんにはお父様って呼んでもらいたいが、まぁいいだろう。で、何かね？」
「あ、はい。あの、私勉強したいんです。でもそういうのどうしたら」
「なんと勤勉な娘さんなんだ！うちのナータとはえらい違いだ。あ

の子は言っても言っても聞かなくてな・・・」
「旦那様、それらに関しては私が。すでに各教育機関に依頼しており、ミオお譲さまにあった方法を検討中でして・・・」
エリクスが一礼をして矢継ぎ早に言う。それをおじ様は手で制した。
「まぁそんなに急くもんじゃない。ミオちゃんも今日ぐらいはゆっくりしたらどうだい？」
「でも・・・」
「まぁまぁ、まずはその細っこい体に肉と体力をつけなければ。風にも飛んでいきそうだからな」
「あ、はい・・・」
ミオは自身の手首を掴んでその細さを確認し、自分の体を見下ろす。骨の浮き出た体は少女と言うよりは少年のようだった。
「まずはティルス（夜会服）に着替えましょう。あなたのためにたくさん用意したのよ」
レクセルの母親がミオの手を取った。
たくさんって、たくさんなんだろうなぁ・・・。王宮でもクローゼットにめいっぱい詰め込まれてたもんね・・・。こんなにいらないって言ったけど、必要だって言われて、本当に一日に5回くらい着替えて、それで一回来たら同じの二度と着ないんだよね。
「まぁまぁ、本当に細いわねぇ。折れちゃいそう。サイズ本当に合うかしら」
「それはミオお譲さまの映像から分析済みですのでご心配なく」
「あらあら、本当エリクスはすごいわねぇ」
って、ちょっと待って。おば様は笑ってるけど、何、この国の技術では人のスリーサイズは映像でバレバレってわけだろうか。
ちょっと不満そうな顔をしていると、
「お譲さま、そのような顔をなさらないで下さい。急な話でしたので仕方なく・・・。普通はこのような手は使いませんから」
エリクスが慌てた様子でフォローしてくれた。

「そ、そう。ごめん、変な顔して」
「いえ、それにこのようなデータは完全に保護されますので」
「うん、分かった。ありがとう」
「ささ、お部屋へ行きましょう。何色にしましょうかねぇ」

いろいろと揉めて、結局深い藍色のドレスで食事ということに決まった。
クローゼットの中には色とりどりのドレスが用意されていてとっかえひっかえ試着させられてようやく決まった。やれやれ。
その間おば様は本当に楽しそうだった。本当の娘であるナータさんがあの性格だから、こういうことあまりなかったそうだ。ナータさんのあの計算高い性格は裕福な商人の娘のおば様の家系からの遺伝らしい。おば様にはそういうところ全然なさそうなのに、世に言う隔世遺伝だろうか。
まあ、このぽわぽわした性格は自分に似ている気もするから、レクセルはマザコンじゃないかと密かに疑ったりもしてみたり。
とにかくそんなこんなで優雅な晩餐が始まった。
「ミオちゃんすごいぞ」
「はい、何でしょう」
食事の席でおじ様は上機嫌に話しだした。
「君に会いたいという旨の超光速通信が３０００通ほどこの星の貴族たちや近隣の惑星から来ている」
「さ、３０００！？」
「はっはっは！さすが救国の女神様だ。次期皇帝の寵妃だったこともあって皆君とつながりを持ちたいと望んでおるようだぞ」
「そ、そんな、私別に寵妃だなんて・・・」
「実際どうだったかなんて関係ないさ。ただ皇子が君のことを気に入っている、そのことが重要なのだ」
「は、はぁ」
「だからまぁ、そんな連中相手にすることはない。ただ私の親族に

は会ってもらいたいのだが」
「はい。それはもちろん構いません」
「そうか。近いうちに私の弟が訪ねてくる。その息子が君と同じくらいの年だから勉強相手にもなるんじゃないかと思っている」
「はい」
「会ったら仲良くしてやってくれ」
そう言っておじ様は少し意地悪そうな笑顔を浮かべた。
「は、はい・・・」
な、何だろう。この笑みは・・・？

従兄弟2

「えへへ、おっ邪魔っします」
惑星オーでの日常が恙無く始まり、ある日思いついてレクセルの部屋に入ってみることを思いついた。
エリクスに聞いたら問題ないとのこと。そっとドアノブを回して中に入る。
「わぁ・・・」
部屋の中は本だらけだった。窓があるところ以外には本棚が据えられ、そこにはぎっしりと難しそうな本が詰まっていた。
だから昼間だというのになんだか薄暗い。
他には広いベッドとデスクぐらい。
「レクセル様のお小さい頃の映像などご覧になりますか？」
部屋を見て回っているとエリクスが大きめのカードペーパーを手に持って入ってきた。カードペーパーは薄っぺらいパソコンのモニターみたいなものだけど、様々な情報をその画面に映し出せて本やノートや新聞の代わりにもなる。高級なものになると反重力装置を付けてふよふよと空中に浮かせて使える。エリクスの持ってるのは少し古いタイプのものらしい。
「レクセルのちっちゃい頃！？見る見る！」
「ではこちらにお座りになってください」
デスクの椅子に座り、その前にエリクスはカードペーパーを立てかけて置く。デスクからふっと光が現れカードペーパーが固定された。
「かっわいいーーー！」
次々と現れる画像には小さなレクセルがたくさん映っていた。
庭で遊んでいる光景、家族との旅行、学校の行事。
「こちらは士官学校時代の映像ですね。ミオお譲さまと同じ年代の頃です」

白に銀色をあしらったブレザータイプの制服姿のレクセルの、まだ幼い顔立ちをした初々しい一枚だ。
「はー、かっこいい・・・」
いや、今でも十分なんだけどさ、なんていうか少年特有の大人になりきれてない危ういかっこよさというかなんというか。いわゆる美少年？
あー、なんかこんな美少年目の前にしたら恋に落ちそうな感じ。さぞかし女の子にモテただろうな・・・。
でもこの頃のレクセルにも会ってみたかったな。１７歳のレクセルか・・・。
「気に入られましたか？よければ印刷なりしてお手元に置かれますか？」
「い、いいの！？」
「はい」
「じゃ、じゃあお願い。あ、でもレクセルには内緒にしてね」
「はい」
エリクスはくすりと笑って、後で小さなカードにしてプレゼントしてくれた。

「レクセルまだ帰ってこないの～」
分かってる。とっても忙しいこともここまで来るのにとても時間もかかることも。
でもこの惑星オーに連れてきてもらってからもう１か月が経った。
あの日王宮での再会してからは実質２日くらいしか一緒にいられなかった。戦艦の別れからは３か月、２日会ってすぐに１か月の別れ・・・。どうしてこうも離れ離れになってしまうのか・・・。
まぁ、自分に生活能力がないから仕方ないけど。あんな都会に一人じゃやっぱり不安・・・。だから毎日一生懸命勉強してるけどそう簡単に覚えることもできないわけで。
結局学校に行く案は没になった。有名すぎて身の危険があるから

だって。だからいつもこの屋敷でエリクスが先生代わりに教えてくれていた。
それでレクセルに会えない不満とか、部屋で勉強ばかりの日々に少しストレスがたまってたから、あんな間違いしちゃったんだよ、うん。

従兄弟3

その日キッチンに行こうとしていた。
いつかレクセルのいるところに行けるようになったらレクセルに料理を作ってあげたいと思って、おば様や料理人に習っていたからだ。
キッチンには廊下を通っても行けるけど、階段脇の部屋を通過して近道をした方が早い。
いつものように朝食の間と呼ばれる家族の小さな団らんにも使われるちょっとした部屋を通っていこうとした。
その部屋のドアを開けたら、椅子に座るダークブルーの髪の後ろ姿が見えた。
おじ様じゃない、この髪は・・・。
「レクセルっ！」
その後ろ頭に飛びついた。
レクセルはきっと自分を驚かそうと思って内緒で来たんだ、そう本気で思ったから。
「うわぁっ」
だがその相手があげた悲鳴はレクセルの声じゃなかった。
別人！？
「きゃー！ご、ごめんなさい！」
慌てて手を放して飛び退(すさ)る。
相手が振り向いたその顔を見てもっと驚いた。あのカードの少年時代のレクセルにそっくりだったから。
いや、でもよくよく見ればちょっと違うけど、でもレクセルを若くしたらきっとこんな・・・。
「何人の顔じろじろ見てんだよ」
レクセル少年時代（仮）は不機嫌そうに言った。
「えっと、レクセルの昔の姿に似てるから・・・」

びっくりしすぎて正直にしどろもどろに答えていると、
「何だ？お前か？救国の女神様は」
レクセル少年時代（仮）は今度はミオをじろじろと見た。
「う、うん・・・。そうだけど、あの、あなたは？」
だがレクセル少年時代（仮）はミオの質問に答えずに後ろ頭に手をやると、
「なーんだ乳ねーなー。あの映像はパッドでも使ってんのかー？」
「！！！」
た、確かに確かに確かにそうだけど！コルセットでぐいぐい締めて寄せて上げてパッド入れてなんとかかんとか作った胸よ！だってそうしないとドレスのデザイン的にあわないからっ！
「しょ、初対面の相手にな、何よそれ！この、ばかっ！」
「な・・・、ばかとはなんだ！お前、口のきき方なってないな！」
「何の騒ぎですか？」
ミオ達の大声を聞きつけて召使いたちやエリクスがやってきた。
「だってこの人が・・・」
「こいつが・・・」
お互い相手を指し合った。
「む・・・」
二人睨み合う。
その様子にエリクス始め召使い達から笑いがこぼれる。
「もー、エリクス、この失礼な人誰？」
「はい、伯爵の弟の御子息でございます。レクセル様には従兄弟になるゼオル様にございます」
いとこ！そういえばおじ様が前に来るとかなんとか言ってたっけ。
「レクセル様によく似ておいででしょう？間違えられたんですね」
エリクスは、その場を冷静な判断で見極めた。さすが、こういうことも分かるのか。
「そ、そりゃ最初間違えたのは悪かったけど、でも・・・」
いきなり乳ねーなーはないでしょう！？ミオは出かかった言葉を

懸命に押さえた。
「ゼオル様も。何か不適切なことをまた仰ったんでしょう？」
今度はゼオルに向かって言う。
「・・・ふん」
ゼオルは答えずにそっぽを向いてしまった。またということはこういうことはよくあるんだろうか・・・。
「全く、ゼオル様、いらっしゃるなら時間をお守りになるように。勝手なことをされるからこういうことになるんですよ」
「分かってるよ、悪かったよ」
ゼオルは拗ねたように謝った。意外と聞きわけはいいのかな。
「本当はリデイル様達が来られてから一緒にご紹介しようと思っていたのですが、まあいいでしょう。お二人ともまずは挨拶を」
その言葉に二人は背を伸ばしきちんと向かい合った。
「初めまして。リデイル・オーヴェルドが第一子、ゼオル・オーヴェルドです。リートン校にて勉学中の身。本日はお目にかかれて光栄です」
ゼオルは片足を引き、片手を肩までもってきて頭を下げる丁寧なお辞儀をした。
「こちらこそ。サハラミオです」
ミオも負けじとスカートをつまんで膝を曲げ、きちんと頭を下げた。
「・・・ふんっ」
が、顔を上げると両方ともそっぽを向き合った。
「ふーん・・・。仲がお悪いようですが、さて、ゼオル様は噂の救国の女神に会いたいとリデイル様に我がままを言って頼み込んでここに来たそうですが・・・」
エリクスはにっこりと笑いながらゼオルに言う。
「え・・・？」
「わ、それ言うなよ！」
ゼオルは慌てたようにエリクスに立ちはだかった。

「ミオお譲さま、そういう訳ですのでゼオル様のことは大目に見てあげてください。照れてるんですよ」
「う、うん・・・」
ミオはちらりとゼオルを見ると彼は少し赤くなって目を逸らした。
「ミオ様、ゼオル様はミオ様の勉学相手にと、夏休みを利用してここに来て下さったのです。しばらくご滞在のご予定ですのでどうぞ仲良くしてくださいますように」
「勉学相手？」
「はい。まぁ半分は遊び相手ですが。同じ年頃の友達をおつくりになった方がよいだろうということで。まぁ半分はそちらの方のゴリ押しですが」
「だから、余計なこと言うなって！」
「これは失礼しました。でもあまり意地は張らないほうがいいですよ」
「いいから、もう行けよ！」
「はい。ではミオお譲さま、ゆっくり遊んであげて下さいね。素行はそれほど良くないですが、ゼオル様はよい人ですので」
「え、うん・・・」
エリクス達はぞろぞろとその場を離れていった。
遊び相手、ねぇ・・・。
ミオがゼオルを見ると、彼はまだそっぽを向いていた。
「えと・・・、パイを焼いていたんだけど、食べる？」
ミオは当初の目的を思い出して話しかけた。おやつという時間にはまだ早いけどまぁ、いいや。
「焼いたって、お前が？」
ゼオルは驚いた顔をしてミオをまじまじと見た。
「うん」
「た、食べる」
少し興奮気味に返事した。
「じゃあ少し待ってて」

ゼオルは素直にうなずいた。

従兄弟４

「まぁまぁうまいな」
ゼオルはパイを頬張りながら言った。
ミオはおかわりの薫茶を注ぎながら半分以上なくなったパイをあきれて見つめていた。
まぁまぁって、これだけ食べておきながら・・・。
「おい、外遊びにいこうぜ」
ゼオルは唐突にミオの手首を取ると立ち上がった。
「は！？何、急に・・・」
「俺はお前に社会勉強させてやれって言われて来たんだよ、あんまり外出ないからって。だから。でも少し着替えて来いよ、帽子と眼鏡で変装もな。早くしろよ。おい、誰か」
「ちょ、放してよ！」
なんて強引なの！？
「何だよ、嫌なのかよ」
「嫌ってわけじゃ・・・」
言い募ろうとしたらぎろりと睨まれた。こ、怖いよー。
「分かった。行けばいいんでしょ」
「そうだよ」
ゼオルはぱっとミオの手を放した。
しょうがないな・・・。街にいけるのは嬉しいけど、なんでこんな強引自分勝手野郎と・・・。
「お呼びでしょうか」
侍女が一人現れて恭しく頭を下げた。
「これから街へ行く。こいつに着替えを。外にリフターを回しておいてくれ」
「かしこまりました。ミオ様、ご一緒に」
「はーい」

「遅い」
玄関から出るとゼオルからムッとした調子で言われた。
何よ、もう。
「気を付けていってらっしゃいませ。ゼオル様、ミオ様を頼みますよ」
「分かってるよ。ったく、ガキのお守りかよ」
「そう言われる割には嬉しそうですが」
「エリクス！」
この顔で嬉しそうって・・・。分からない・・・。
リフターの中ではゼオルは終始無言だった。窓の方を向いて寝ているようにも見えたから放っておいた。そんなにしゃべることもないし。
ちなみにリフターは自動運転。目的地を入力すれば勝手にそこまで連れってってくれる。レクセルがいつも運転してるのは単に好きなだけ。
でも本当、しゃべらなければレクセルそっくりなのに・・・。あー、レクセルだったらいいのに。
「なんだよ」
「わっ。後ろに目があるの？」
「あるわけないだろ。ガラスに映ってるだけだ。人のこと見やがって」
「む・・・。レクセルだったらいいなって思っただけよ。こんなに似てるのに、別人なんだもん」
「悪かったな」
あれ、随分殊勝？怒鳴り返されてもおかしくないのに。
「似てるだけで別人で。何百回も聞かされた。レクセル兄さんはあなのにこうなのに、それに比べてって、な」
「ゼオル・・・」
「俺はレクセル兄さんみたいに頭も良くないし、運動もできないし、

態度も悪い。おまけに憧れた女の子はすでに兄さんのものだしな」
「へ・・・」
「会いたくて親父に無理やり頼んだけど、けど会ってどうなるってもんでもないのにな・・・。俺って本当、馬鹿だな。何やってるんだろう」
小さく呟くような声で一人ごちて、体を小さく丸めた。
「えーと・・・」
「悪ぃ、こんなこと言う気なかったんだけどな。聞かなかったことにしてくれ」
「う、うん・・・」
本当に、本当にいったい何なの!? 一人で怒って一人で落ち込んで。訳わかんない。

「ねぇ、どこ行くのよ」
リフターを駐車場に置き、ゼオルは何も言わずに歩き出した。
「ねぇってば!」
だがゼオルは何も答えずにすたすたと歩いていく。
ミオはゼオルの肩に後ろから手をかけてぐいっと体重をかけた。
「うおわっ! 何すんだよ、っていうかお前触るなっ」
ゼオルはミオの手を振り払って距離をとった。
「何よ人をばい菌みたいに! 足速すぎるのよ、はぐれちゃうでしょ!」
「ちっ、仕方ねーなー・・・」
ゼオルはそう言って歩く速度を落とした。
「ねぇ、どこ行くの?」
「ティルベでいいだろ」
「何、ティルベって」
「知らねーのか。じゃあついてからのお楽しみ」
「むぅ・・・」

てくてく歩いてやがて入口に派手な看板が掲げられた一つの建物に入る。こちらの文字で「ティルベ」と読めた。「ベ」は場とか地域とかエリアとかそんな感じの単語だけど、「ティル」は分からない。まだまだだなぁ。

「いらっしゃいませ。お二人様ですか？」

入口の受付の女性が声を掛ける。

「ああ。こいつ初心者、俺は上級のほうで」

「かしこまりました。ではこちらをどうぞ」

と言ってリストバンドみたいなものを四つ渡された。

何だろう？表面にはいくつかのボタンや表示窓がついてる。

「さ、行くぞ」

ゼオルはさっさと歩いて大きな扉を開けた。

「わぁっ、何これ」

軽快な音楽とともに飛び込んできた光景は、大きなドーム状の半透明な空間の中にたくさんの人たちが、その中を自在に滑っている、というか飛んでるというものだった。

「ティルは浮遊を意味する言葉。手首と足首にさっき渡された重力制御装置をつけてあの中で動き回ることができる。ま、やってみるのが一番だって」

ゼオルが慣れた手つきでリストバンドを巻きつけていく。それを同じようにとりつけていく。

「ええっと」

「ん、違う、こう・・・」

もたもたしてたらゼオルが代わりにやってくれた。

「へー、優しいところもあるんだねー」

「何だよ！俺が優しくないとでも言うのかよ」

「うん」

「・・・んなことねーよ。教えてやるからついてこい」

「はーい、先生」

「先生って、お前なぁ」

ゼオルはミオの手を引いてドームに入る。
「いいか、気をつけろよ・・・」
「うわぁっ！！」
足を踏み入れた瞬間ふわっと体が浮いた。バランスを崩して倒れそうになる。
「言ってる側からっ」
ゼオルはミオの腕を取り、さらに腰に手を回す。自然くっつき合う格好になる。
至近距離で見つめあってお互い声も出ない。
「わ、悪ぃ・・・」
耳まで赤く染めたゼオルがそっとミオを放す。
「わっ、駄目、手持ってて、放さないで！」
ミオはまたバランスを崩しかけてゼオルの手を掴む。まるでスケートを初めてする時のようだ。
ゼオルは赤くなってしどろもどろになりながらも説明を始める。
「い、いいか、普通にしてりゃ地面歩いてるのと変わりないから。速度や高さはこの装置で調整する。ほら」
ゼオルが操作するとゼオルの体は一段階大きく浮く。
「こうやって調節しながら滑るんだ。上手い奴はああいうこともできる」
ゼオルが上を指す。そこにはドームの天井付近でアクロバティックな滑りをしている若者が達がいた。
「さ、とりあえず前進んでみろ」
「ふえええ・・・」
ミオはへっぴり腰のままゼオルの手をしっかり握って涙目になっていた。
「やだぁ、怖いぃ、帰るー」
ミオはドームを半周もしないうちに弱音を上げた。
「しょがーねーなー。慣れりゃ楽しいんだけどな」
ゼオルはミオの泣きごとを聞き入れてドームから出た。

「俺が手本見せてやるから、そこで見てろよ」
「うん」

従兄弟5

ゼオルは再びドームの中に入っていくとすぐに高く舞い上がり、頂上付近を滑り始めた。
得意になってミオに手を振ってやると、ミオはぶんぶんと手を振り返してくれた。
そうやって調子に乗ってしばらく滑っていたときだった。
ふと気がつくとミオの姿が見えない。
（やべっ！）
ゼオルは慌ててドームを出た。
しかしミオは元の位置にはいない。辺りを見回してみてもいない。
（俺って奴は本当に・・・）
約束だった。ミオを街に出しても彼女を決して危険な目に遭わさないこと。渋る親父をなんとかかんとか説得してやっと手に入れた、ミオの年の近い友達の位置。ミオの友達探しの話を聞いた時は小躍りした。他の親戚の女の子が候補に上がっていたが、街に出るならいざという時男の方がいいとか、手なんか絶対出さないからとか言ってなんとかかんとか親を説得した。
（自分みたいな馬鹿がこの帝国に何万といるんだから・・・）
帝国救国の女神は帝国が兵士たちの士気を上げるために打ち出したプロパガンダだが、彼女を本当の女神として崇拝している者も少なくない。
超光速通信映像で見た時から一目惚れだった。しかもその存在だけで劣勢だった帝国を瞬く間に優勢へと持って行った希望の女神、勝利の乙女。
映像は幾度も流され、帝国のあちこちにその姿は掲げられた。
その後彼女は皇太子の妃として宮殿に入ってしまった。
それからふっつりと姿を現さなくなった。
もう自分の手には届かない遠いところへ行ってしまったのだと思

った。宮殿という雲の上の領域へ。
ところが受勲式での皇太子妃下賜事件。帝国の勝利の女神は一人の男性のものとなってまたこの世界に戻ってきた。しかも自分のいとこの恋人として。
絶望もしたが希望も持った。ひょっとしたら会えるんじゃないか、誰よりも近くで話ができるんじゃないか。レクセル兄さんにそっくりだという自分にミオは興味を持ってくれるんじゃないか、と。
そして予定を前倒しして一人でここまで来てしまった。
最高の夏休みにするつもりだった。だけど・・・。
（本当俺って奴は・・・）
何得意がってティルベなんてしてたんだろう。彼女を守るって、騎士や英雄になったつもりで勇んで来たのに、すぐにこんなことになるなんて・・・。
ガラの悪い奴らにからまれてたらどうしよう、救国の女神だってばれたら騒ぎが・・・。
どこから探せばいい？どこに行った？とにかくも走り出そうとした時、
「ゼオルどうしたの？」
ほのぼのとした声が後ろからかかった。
「馬鹿っ、どこ行ってたんだよ！」
振り返って間髪いれずに叫んだ。
「馬鹿ってなによっ、ちょっとお手洗い行ってただけでしょう？」
「お、俺は、お前が心配でっ・・・はぁ」
自分の情けなさにため息が出る。早とちりした揚句に彼女に罵声を浴びせるだなんて・・・。何でこんなに駄目な奴なんだろう・・・。
「ゼオルっておもしろいね」
「は、はぁ？」
ミオはにこにことゼオルを見上げている。何を言ってるんだ？
「だって、一人で怒ったり落ち込んだり。見ておもしろい」

何だろう、新手のからかいだろうか。でもミオの顔からは邪気は感じられない。誉められてるってことでいいのか？
「怒鳴ってごめん、悪かった」
毒気を抜かれて素直に謝った。
「いいのいいの。ゼオルは私の用心棒でいるんだよね。何も言わずにいなくなっちゃってごめんね」
「・・・」
かわいい・・・。
胸って、本当にキュンってなるんだな・・・。だがいつもの癖で、
「わ、分かればいいんだよ！もう帰るぞ！」
照れ隠しでぶっきらぼうに言い放つ。
「はいはい」
ミオは余裕の表情で先に立って歩き出す。
なんか、やっぱり落ち着いてるよな。俺だけ一人盛り上がったり盛り下がったり。情けねぇ・・・。　もう、大人だから？
そりゃ、そうだろうな・・・。
一瞬ミオの痴態が脳裏に浮かぶ。
その妄想を振り払ってミオの後を追いかけた。

従兄弟6

「お帰りなさいませ。如何でしたか？」
帰るとエリクスが玄関で待っていた。
「うーん、楽しかった、かな？」
人差し指を顎に当てて答えた。
あんまり何もしてないんだけど。
「親父はまだ来ないのか？」
リフターから降りて来ざま、ゼオルは尋ねた。
「ゼオル様が早く来すぎなんですよ。予定通り明日の便で来られます」
「あ、そう」
「旦那様が帰っておいでですのでどうかご挨拶を」
「分かってるよ。どこ？」
「東の広間に・・・」
「私少し休んでていい？疲れちゃった」
久々の運動という運動だったので少し眠い。
「ええ。お夕食には呼びますから」

「嘘っ」
目が覚めたのは夜中だった。
ほんの少し横になるつもりで爆睡してしまったようだ。
真っ暗な室内。
ベッドサイドの明かりをつけて時間を確かめる。
惑星オーの自転時間で２２時。
起こしてくれればいいのに・・・。
寝なおそうかとも思ったけど眠れそうにない。
北に面した方の窓に近寄って窓を開ける。
月のないこの星は夜は星明かりだけ。最初は変に思ったけど、だ

んだんと慣れた。
ふっと視線を感じて顔をその方に向けた。
大きな四角と小さな四角がLの字型にくっついたようなこの建物。東端のこの部屋から西を臨むとその小さな四角の方の建物の東窓が見える。
明かりの付いた部屋、ちょうど客用の寝室、その人影は・・・。
「ゼオル・・・！？」
向こうも気付いたようだ。離れて距離はあるけど驚いたような挙動が見て取れる。
手を振ってきたので振り返してあげた。
すると中にひっこんでしまった。
な、何だったんだろう・・・？ひょっとしてずっと見てた・・・？
ピピピ・・・
「ひゃぁ！」
急に電子音が鳴ったからびっくりした。
なんてことない、館内通信の呼び出し音だ。
手近な端末を起動させて繋ぐ。案の定ゼオルだ。
「は、はい・・・」
「え・・・と、おはよう？」
「あはは、夜中だよ」
「そ、そうだな。はは。や、あの、大丈夫だったかと思って・・・」
緊張気味のゼオルの声。
「うん、ちょっと疲れちゃったみたい。でも大丈夫だよ」
「そか、よかった」
「うん」
沈黙。
「えっと、腹、減ってないか？」
ゼオルは慌てたように話をつなぐ。
「うーん、そうでもないけど・・・」
「夕食残してあるから食べた方がいいんじゃないか？あ、俺ちょう

ど小腹が減ってきたとこだし、一緒にどうだ？」
「う、うん・・・？」
こんな夜中に二人で・・・？いいの、かな・・・？
「あ、嫌なら別にいいんだ。別に」
「うーん、嫌じゃないけど・・・」
「本当！？じゃ、朝食の間に来いよ」
「う、うん」
「じゃ」
通信はぷつりと切れた。
相変わらず強引な。
まぁ、いいか。喉も乾いたし、お腹もちょっと空いてるし、何より眠れそうもないし。しばらくゼオルに話し相手になってもらうのもいいだろう。

朝食の間につくとゼオルがすでにいて、キッチンから夕食の残りを運んでくれていた。意外と気がきくのかも。
「座ってろよ」
「うん・・・」
しんと静かな部屋にかちゃかちゃとゼオルの運ぶ皿の音だけが響く。
召使い達ももう休んでいるのだろう。キッチンにも誰もいないようだ。
「さ、どうぞ」
目の前に皿が並んだ。
「ありがとう、いただきます」
好きな魚の料理だった。
「おいし～。食べ逃さなくてよかった」
「そうか？お前って何が好きなんだ？」
ゼオルも座って自分用に用意したパンのサンドを頬張りながら聞く。

「やっぱり魚。お肉も好きだけどね」
「ふーん。こっちの料理は口に合うのか？」
「うん。何とか大丈夫。外国の料理と同じ感じ。食べ慣れてないだけで食べれないことない。大分慣れたしね」
「そっか、すごいよな、お前。帰りたくなったりしないか？」
「う・・・ん、それ言われるとちょっと辛いな。帰りたくないなんてことないけど、帰りたいって言うと困った顔する人がいるんだよね」
もしそんなことを言った時のレクセルの顔が思い浮かんで自然頬が緩んだ。
「勝ち目なんかないって分かってるけど・・・」
「ん？」
ふっと顔を上げるとゼオルが真剣な目で自分を見ていることに気づいた。
レクセルによく似た顔。子供っぽさをなくしたその表情はレクセルにひどく似ていた。
「ぜ、ゼオル・・・？」
そしてレクセルもよく自分に向けてくる熱っぽい眼差し。その奥に潜む激情が伝わってきて胸が熱く痛んだ。
「君がレクセル兄さんと強い絆で結ばれてるのは知ってるし、分かってる。でもほんの小さな隙間でいいからそこに俺を入れてくれないか？」
ゼオルの手が伸びてきて指先に触れる。
「ミオ、君のことが好きだ・・・」
ゼオルはレクセルの声を真似て告げた。
反則・・・。
みるみる顔に血が上っていった。
レクセルじゃないのに、あの荒っぽくて子供っぽくて強引野郎のゼオルなのに！
胸がドキドキと大きく高鳴って触れられた指先が痺れる。

椅子を蹴って立ち上がって逃げ出すべきなのに体が動かない。
動かないのを肯定と見てとったのか、ゼオルは立ち上がって近づいてきた。触れられた左手の指先はしっかりと握られた。
一歩、一歩と近づいてくる。
ちょ、ちょっと、ちょっと待って・・・！！
顔が近付いてきた。
必死になって顔をそむけたが、ゼオルの右手が頬を押さえて、ゼオルの顔が回りこんできて・・・。
心地よい柔らかい感触が触れて離れていった。
「誰にも言うなよ」
ゼオルはそう言って部屋を出ていった。

「いやー、映像よりずっとかわいいお譲さんだ！」
「そうだろう。レクセルにこんな甲斐性があったとはな」
「ずいぶんと健康的になられたようでよかったですわ」
「ええ、よく食べるんですのよ」
次の日レクセルのお父さんの弟、つまりゼオルのお父さんのリデイルさんが妻とともにやってきた。
その会話を上の空で聞いていた。
その場にゼオルももちろん同席していたが、昨日のことなんか何もなかったように平然とした顔でいる。
こっちは寝不足でふらふらだというのに・・・。
「ミオお譲さま、どうしました？」
エリクスが心配そうに聞いてきた。
「え、何でもないよ！昨日変な時間に寝て起きたからぼーっとしちゃって・・・」
「そうですか」
「ミオ、つまんねーから行こうぜ」
ゼオルが立ち上がって手を振って促した。

「こら、お前は本当に身勝手な・・・」
父親の小言も聞かずすたすたと歩いて出て行ってしまう。
「あ、あの、失礼します」
その後を追う。
うう、なんでだろう。何か立場が弱くなってるよ・・・。
ゼオルのこと、無視したいけどできない。言うこと聞いちゃうのなんでだろう・・・。
「ミオお譲さま・・・？」
エリクスが変化に気づいたのか声をかけてきたが、聞こえないふりをしてゼオルの後を追った。

午後の日差しが眩しい庭園まで出てきた。刈り込んだトピアリーの林、地面は白い石が敷き詰められた美しい舗道。白い光が反射して一層眩しい。
トピアリーの木陰に日差しを避けるように入る。
また二人きり・・・。
だめだって分かってるけど、心とは裏腹に体は動かない。
「き、昨日のことだけどっ・・・」
「謝らねーからな」
「な！？」
「俺はお前のこと好きだ。どうしようもない横恋慕だけどな。でも謝ったら俺が悪いことしたことになるじゃねーか。だから謝らない」
「で、でも、私は・・・」
「まだ、兄さんのモノじゃないんだろう？」
「・・・！！」
そ、そりゃ、そーだけど、何で知ってるのよ！
「まだチャンスはある・・・そうだろう？」
ゼオルの手が伸ばされて頬にあてられる。びくっとして逃げようとすると、
「ミオ・・・」

またレクセルの声音を使う。
その声で言われると弱い。目の前にいるのはレクセルじゃないのに、そうじゃないかと錯覚してしまう。
ゼオルの顔が迫ってくる・・・。
「はい、そこまでですよ」
ぱんぱんと手を叩きながらエリクスが現れた。二人慌てて離れる。
「全く、これはどういうことです？ゼオル様」
エリクスはミオの前に立ちはだかり、ゼオルをやんわりと退ける。
「・・・約束と違いますが？」
ゼオルは何かを言いかけて言葉を飲み込み、肩を落とした。
「すぐに屋敷から出て行ってもらいましょう。今後はこの屋敷に出入りは禁止です」
「そんな・・・っ」
ゼオルは未練がましそうに手を上げ、ミオに近づこうとする。
「我がお譲さまに不埒な行為を働いたこと、許すわけにはいきません。もう少し分別のある方だと思ってましたが・・・」
エリクスはさっと動いてその手を止める。
「悪かったよ・・・」
ゼオルはあきらめたように一歩引いた。
「二度とお譲さまに近づかないと、誓って下さい」
「え・・・そこまで・・・？」
ミオはびっくりして言う。
「お譲さま！これは大変なことなのですよ」
「私ゼオル・オードヴェルは二度とミオに近づきません・・・。これでいいんだろう？」
エリクスはうなずいた。
「じゃあな」
ゼオルは踵（きびす）を返して頭をしっかりと上げて歩み去った。
「ゼオル・・・」
その後ろ姿を見送った。

なんだろう、すごく寂しい・・・・。
「お譲さま」
はっとしてエリクスを見上げた。
「全く・・・。しっかりなさってください。いくら寂しいからと、このような・・・」
「レクセルには・・・」
「もちろん報告します」
「！！」
「と、言いたいところですが、言わなくていいことを言う必要はないと思われます。このことは秘密になさっておいた方がよいでしょう」
「ごめんなさい・・・ありがとう」
「一応聞いておきますが、昨日の夜何があったんですか？」
「キスを・・・」
「それだけですか？」
ミオはうつむきながらこくりとうなづいた。
エリクスははぁと小さくため息をついてから、
「まぁ、これくらいで済んで良かった、と思うことにしましょう。取り返しのつかない過ちはなかったようですし」
と許してくれた。
その日のうちにゼオルは挨拶もなしにこの館を出て行った。
この件はこれでおしまいだと思った。
けれど・・・。

従兄弟7

バレた。
ミオは通信画面の前で硬直していた。
画面の中には不機嫌そうに黙りこくったレクセルの顔。さっきから顔が上げれない。
やはりゼオルの突然の帰還とミオの不審な態度にエリクスも白状せざるを得なかったようだ。
何で、嘘がつけないかな・・・。
すぐに顔に出る自分の素直さに落胆した。
「ミオ、こちらを向きなさい」
「は、はい・・・」
そろっと顔を上げる。眉間にしわのの入った険しい顔つきのレクセル。
こ、怖い・・・。
レクセルは腕を組んでため息交じりに言う。
「どうしてこんなことになったんだ？」
「どうしてって言われても・・・。こんなことになるなんて思わなかったし、ゼオルがあんなことするとは思わなかったし・・・」
「つまり、予測できなかった、と？」
「そう・・・かな？」
「ミオ」
「はいっ」
「俺は怒ってるんだ。ちゃんと答えて欲しい」
「・・・だって、レクセルに似てるし、声がね、すっごく似てたの」
「いくら顔と声が似ているからと、そうやすやすとゼオルなんかにつけこまれるなんて、無防備が過ぎる」
「う・・・」
「まだ若いし、経験も少ないから仕方ないかもしれないが、もっと

しっかりして欲しい」
「は、はい・・・」
「あまり分かってないかもしれないな。言っておくが君は俺のものだ。他の男に渡すつもりは毛頭ない。だから君の事を大切に思ってるし、守っていきたいと思ってる。だけど君からの誠意が感じられないなら、こっちも考え直さなきゃならないかもしれない」
「・・・！」
ようやく、事の重大さが分かった。
・・・甘くて馬鹿だった。寂しいからと、レクセルに似た人だからと、それに浮かれてもいたのかもしれない。でもそんなことで本当に大切なものを失くしてしまうところだった。
「ご、めんなさい・・・」
そのことが分かると涙とともに謝罪の言葉が出てきた。
「ミ、ミオ・・・？」
「もうしない、二度としない。レクセルに嫌われたらもう生きていけない・・・。私、レクセルがいなかったら・・・う、わああっ」
「ちょ、まっ、泣くなっ！ミオ！・・・ああ、もうっ。分かってくれたならいいんだ・・・、だから泣くなって・・・。エ、エリクスっ、いないかっ！？」
隣の部屋で控えていたのだろう。エリクスがすぐに飛んできた。
「おや、女性を泣かせるとは、レクセル様も随分と罪つくりになったものですねぇ」
「冗談を言うな。泣いてるのは苦手なんだ、なんとかしてくれ・・・」
「はいはい」
「た、頼んだ」
通信はぷつりと切れた。
「レクセル様にも苦手なものがあったとは。これは意外な発見ですね。さ、お譲さま。レクセル様はもう怒ってないですよ。大丈夫ですから、泣かなくていいんですよ」

「で、でも・・・、ぅく、きっと嫌われた・・・」
エリクスはよしよしとばかりに頭をなでてくれた。
「レクセル様がミオお譲さまを嫌われることなんかありませんよ。ゼオル様のことは犬にでも噛まれたと思って忘れることです。少しお怒りになりましたけど、ミオ様が反省したなら、許してくれていますよ」
「・・・本当？」
「ええ」
レリフェルの柔らかな美しい頬笑みは心を軽くする。
ようやく涙が止まり、落ち着いた。
「もう一度お話になりますか？」
「ううん。こんな汚い顔見せたくないし、手紙でも書くことにする」
「それはよろしいですね。ちょうどいい練習になりますし。お手伝いしましょう」
「うん」
そして覚えたての文字を拙い幼稚園児のような文章で届けたら、後日熱烈なラブレターとなって返ってきた。
読めないのでエリクスに代わりに読んでもらったら、エリクスの葉が浮いてしまったほどだ。

皇太子の誕生日1

「皇子の誕生日会？」
画面に映し出された招待状には自分の名前が美しい飾り文字で書かれていた。
それだけはちゃんと読めるしね。
「そうだ」
超光速通信で届くレクセルの顔は何故か不機嫌そうだった。
「叙勲式で時々会いたいと言っていたのは本気だったらしいな」
「そんなこと言ってたっけ？」
帝国の暦としては秋も深まっている折、叙勲式は夏の初めだったから大分前の記憶だし、あの時は訳わかんなかったからかなぁ・・・。
「殿下からの招待を断るわけにもいかないしな・・・」
「どうしてそんなに不機嫌そうなの？皇子のお誕生日会なんてきっと素敵でしょう？」
「君のその鈍いところはいいことなのか悪いことなのか・・・」
「？」
「皇子はいまだ君のことを憎からず思ってるんだぞ。それなのにその皇子のところに行くだなんて・・・」
「えーと、妬いてるってこと？」
「そうだ」
珍しく子供っぽいぶすっとした表情で言う。
「うふふ・・・。でも大丈夫よ。皇子はすっごくいい子で優しいし・・・」
「だから嫌なんじゃないか！君がそうやって皇子を悪く思ってないから・・・。皇子は本当、素晴らしい方だよ。あの歳でいくつもの功績をあげて、人格も申し分ない。君がなびきゃしないかと・・・」
「そんなの心配しなくても大丈夫だって」

「だといいけど」
レクセルは不機嫌そうな顔に戻って投げやりに言う。
「本当は行かせたくはないがな。まぁ、君がこっちに来る機会ができたと思えば・・・」
「うん。皇子に感謝した方がいいかもね」
「複雑だ・・・」
顔に手をおいて天を仰いだ。
「レクセルがちっとも帰ってきてくれないからよ」
「それは本当にすまない・・・。忙しくて・・・。まぁ、早く用意を整えてこっちに来てくれ。・・・待ってるから」
「うん・・・」
しばらく無言で二人見つめあった。

通信を切って深く息を吐き、背もたれに頭を預ける。ギッと軋んだ音がして人のいなくなった研究室に響く。
一通り仕事が終わってからやっとやっかいな問題の報告がミオにできた。
恒星間の通信は金がかかるので帝国に砕身奉仕している身としては、帝国の施設の私的な使用などささいなことだろう。
時差で向こうは明るい日差しの中、元気そうなミオの笑顔を思い出して笑みがこぼれる。
本当、元気になって。叙勲式の頃がひどかったもんな。
折れそうなほど細かった手首の感触が未だに掌に残る。
まぁ、あれはあれでよかったけど。いかにも儚げでつい守ってやりたくなるような・・・。
でも今の方が健康的でずっといい。
「さ、帰ろう帰ろう」
荷物をまとめて研究室を出た。

リフターに乗って郊外の仕事場である研究施設から街へ入り、繁華街へと差しかかった。
たくさんの商店が並び、夜になっても煌びやかな明かりを放っている。
（そういえば、ミオにドレスがいるな・・・）
いつもは気にもかけない服飾ブランドのウィンドウに目を遣る。
皇子の誕生日パーティーとなったらそれ相応のものを着せたい。
妻の（まだだけど）服飾品を揃えるのは家の務めだ。
ふとよく目にする有名ブランドの店を見つけ、近くにリフターを置いて覗いてみることにした。
「いらっしゃいませー」
上品な女性がにこにこと愛想よく近づいてきた。
「まぁ、オードヴェル様ではありませんか！？」
「ええ、そうです」
自分の顔はミオとともに帝国じゅうに知れ渡っているのだ。どこへいっても顔で通じる。自己紹介の手間が省けていい。
「こちらへはもしやミオ様への贈り物ですか」
「はい」
さすがよく分かるものだ。
「皇太子殿下の誕生パーティーによばれてね。ちゃんとしたものを用意したいと」
「まぁぁ！それならうってつけのものがございますわ！」
店員は鼻息も荒く勢い込んで奥へと走っていった。
「こちらは我がブランドのデザイナーの最新作です。他の店ではまだ取り扱っておりませんですのよ」
と、紺色のドレスを手に戻ってきた。
「きれいだな」
「そうでございましょう！ミオ様にもよくお似合いだと思いますわ！」
「サイズが分からないんだが」

「それくらいは映像から正確なサイズを解析できます。それに合わせてお直しも致しましょう」
「そうか。じゃあお願いする」
「ありがとうございます！」
カードで支払いをし、後で送ってもらうことにして店を出た。
店を出るまではしゃんとしていたが、見送りの店員がいなくなってから肩を落とした。
・・・けっこう高かったな、ちゃんと値段をきけばよかった・・・。
少し、いやだいぶ後悔しながら家路についた。

皇太子の誕生日2

「ミオ、久し振り」
「う、うん・・・」
人でごった返す宇宙港。そのざわめきの中この二人だけが静かだった。
あまりに久し振りすぎてなんだかぎこちない。
話そうと思ったことたくさんあったはずなのに何も出てこない。
「行こうか」
「うん」
さっきからうなずいてしかいない。口をどこにやってしまったんだろう。
「どうした？疲れたか？」
「ううん。そうじゃないけど・・・」
先に立って歩くレクセルの広い背中を見ていると、きちんと重力制御された宇宙港なのに、嬉しさでふわふわと浮きあがってしまいそうだ。
さっきから黙っているのは馬鹿みたいににやけてくる顔を必死に平常に戻そうと努めてるから。
そんな顔レクセルに見られたくないし。
はぁ、レクセルは相変わらずかっこいいし。少し光沢のある上品な黒のジャケットがよく似合う。
広い肩幅、均整のとれた体つき。後姿だけでもほれぼれとしてしまう。
そんな視線を感じ取ったのか、レクセルがくるりと振り返った。
とたんに顔が真っ赤になる。
「や、顔見ないで・・・」
「何やってんだよ」
慌てて頬を押さえてうつむいたのに、レクセルは笑いながらそれ

を外してしまう。
触れられた温かい手の感触も久し振りでまた顔に熱が上がる。
「すげー真っ赤」
外した手の代わりにレクセルが頬に手をやり、少し上を向かせる。
優しい瞳でミオの目を覗き込む。
この体勢は・・・。
こ、こんな公衆の面前でキスはやばいんじゃ・・・。
心臓が口から飛び出るほどどきどきしたが、レクセルは柔らかく指を外すとまた歩き出した。
はっとしてその後を慌てて追いかける。
ああ、もう、やだ・・・。なんでこんなにどきどきするんだろう。もっとしっかりしたいのに。
もっと大人になって瀟洒な会話でもできたらいいのに。こんなんじゃご主人様に会えてうれしいわんこと一緒の反応じゃない。
でももしっぽが生えてたらぶんぶん振り回してるんだろな。
うう・・・。
なんてこと考えながらひたすらレクセルの後をついて行ってたら人通りのない通路にきた。
あれ、どこに行くの？
と思ったらさらに角を曲がってそこでぐいっと腕を引かれた。
「え？」
と思っているうちに壁に押し付けられて、頭の両脇にレクセルが腕をつく。逃げられない、この体勢。
目の前にはやけに真剣な顔のレクセル。頭には狼の耳が見えるようだった。
「ちょ、待って、レクセルどうしたの・・・」
「待てない」
そう言って唇を押しつけてくる。荒々しい性急なキス。
「んっ・・・」
慌ててその顔を手で押しのける。

「こんなとこでだめよ、人が来ちゃう」
「来ないさ・・・」
ミオの小さな抵抗などものともせずさらに唇を重ね合わせる。
「んん・・・ふっ」
キスしながらレクセルは身を少しかがめ、ミオをきつく抱きしめた。
「会いたかった・・・百万年ぐらい待った気持ちだよ」
唇を離すとミオの肩に顔を乗せ、首筋に息を吹きかけながら甘くささやいた。
白旗をぱたぱたと上げて降参したい。何だろう、何に負けたんだろう。でも心の中は敗北感でいっぱいだった。
「ミオ・・・」
されに迫られそうになったが、カツカツと靴音が聞こえたのでその場はそれで収まった。
くだけそうな腰をレクセルに支えられてなんとか歩く。変に思われないかな・・・。
角を曲がって現れたのはここの職員の人か、制服を着た人がこちらのことなんか気にもかけず足早にすれ違って行った。
「大丈夫か？しかし、こんな簡単に連れ込まれて・・・本当隙だらけだな」
「う・・・」
まだあのこと怒ってる？そりゃそうだよね・・・。
しっかりしようって思ってたところなのにこの体たらく。相手がレクセルじゃなかったらと思うとぞっとする。
本当、まだまだだな・・・。
がっくり肩を落としていると、
「そ、そんな落ち込むなよ！今のは俺も悪い・・・。待ちきれなくて。本当、男はどうしようもないな」
と慌てた様子でなだめにかかった。
「俺もゼオルのこと言えないな。君みたいなかわいい子、物陰に連

れ込まずにはいられないし」
「×××！！」
「それにあんなもの欲しそうな顔されちゃ、こっちはたまらない」
また狼の耳が見えた気がした。
「そ、そんな顔してないもんっ」
拳をつくってレクセルの肩をかすめさせる。
「うわっ、やられた」
レクセルは大げさに飛び退く。腰はなんとか立ったのでそのまま逃げるように早足でレクセルを置いて歩き出した。
「うわ、待ってくれよ、ごめん、悪かった。少しはしゃぎすぎたよ・・・」
「もっと紳士的にお願いします」
つんと顔を背ける。
「はい、お譲さま」
レクセルは恭しくミオの手を取って歩き出した。

皇太子の誕生日3

衛星軌道上に浮かぶ宇宙港から移動艇に乗って帝星に降り立つ。
遠くには緑に輝く防御壁が見える。宇宙港専用ポートから帝都まではまだまだだ。
レクセルのリフターに乗って移動する。都会的な景色を楽しみながら乗っていたところに、レクセルがこう切り出した。
「これからこのまま君を俺のマンションに連れて行きたいところなんだが・・・」
その言葉にどきっとして、かっと顔が赤くなる。
やっぱりそういう展開になるよね・・・。どどど、どうしよう・・・。別に考えてなかったわけじゃないけど・・・さ。
ぎゅっと膝の上で手を握りしめる。
あのマンションで起こったことを思い出して胸がきゅっと痛くなる。荒い息使いのレクセルの唇が胸の上を滑って行って・・・。
思い出すだけで羞恥で体が熱くなる。
い、嫌なわけじゃないけど、まだ心の準備が・・・。
うつむいて動かなくなった自分を見てレクセルは、
「まぁ、そうだろうな。だからナータのとこに泊まるといい」
と言ってくれた。
よかった・・・。
ほっとして緊張を解く。
「そんなにほっとされると、なんだかすごく罪悪感を感じるな」
「ご、ごめんなさい」
「いや、いいんだよ。楽しみは取っておく方だしね」
「とって・・・」
「おっと。ちょっと言い方がまずかったかな？いや、まだ正式に結婚もしてないのに君と婚前交渉するのは対外的にもまずいからね。どちらにしても、君に手を出せないさ」

「は、はぁ・・・」
とにかくも身の安全は保障されるわけだ。
「結婚式はいつにしようか」
レクセルがさらっと言い出した。
「は、はい！？」
「そんな驚くなよ。来年、もっと先になるかな・・・」
「ええっと・・・」
「ま、ゆっくり考えててくれよ」
「はい・・・」
な、何か話が・・・。でも、そうか・・・。そうだよね。
面くらいながらもその日のことを漠然と思った。

帝都でも有名なお譲さま大学。その近くにナータは部屋を借りて住んでいた。訪問するのは初めてだ。呼び鈴を鳴らすとすぐに出てきた。
「兄さんいらっしゃい」
今度の髪の色は明るい茶色だ。化粧も相変わらず派手だな・・・。
「ナータ悪いな」
「いいわよ。ミオちゃん一人泊めるくらい。さ、入って」
広々としたリビング、こいつも結構いいところに住んでるじゃないか。
「皇子の誕生日あさってだっけ。準備はいいの？」
「一応よさそうなの買ってみたんだが・・・」
「ふーん・・・、これ？・・・って兄さん！これ何！？」
ブランド物大好きな妹ナータが目ざとく店のロゴの入った箱をみつけて騒ぎ出した。
「あー、ミオに似合うかと思ってな・・・」
「だだだ、だってこれ超一流ブランドで値段も超一流のとこじゃない！」

「いいなって思ったから買っただけだ」
「こんな高いのミオちゃんには早いわよ！」
「買ったものは仕方ないだろう・・・」
「兄さんミオちゃんに甘すぎ！初めからこんな贅沢させて、浪費家になったらどうするの！？」
「ミオはそんなんじゃないよ」
「わかんないじゃない！」
「お前にも何か買ってやるから・・・」
「それじゃ、仕方ないわね」
本当にこいつは扱いやすい・・・。金はかかるが・・・。
その様子をミオはぽかんと見ていた。
相変わらずぽやっとしている子だ。その鈍くさそうなところを捕まえて食べてしまいたい。
「これ、君に」
箱を手渡す。
「私に？」
ミオは不思議そうにしながら受け取った。嬉しくないわけじゃないんだよな・・・、きっとまた頭がついていってないんだろう。
「開けてみてよ」
「うん」
包装を解いて薄紙をとると、あのきれいな紺色のドレスが姿を現す。
「わぁ、きれい」
「だろう？」
「へー、兄さんにしてはいい趣味してるじゃない？」
「着てみてくれないか？」
「うん」
ほどなくしてそのドレス姿のミオが現れた。
「ちょっと大人っぽすぎない・・・？」
恥ずかしそうにしながらもくるりと回ってみせる。

「いや、いいよ、よく似合うよ・・・」
ベアトップの胸元にふんわりとしたデザインのリボンをあしらい、アシンメトリーな裾のラインの片方は膝上まできている。
かわいらしくも確かに大人っぽい。
「でも兄さん、靴は？バッグは？アクセサリーは？」
「え？」
「『え？』じゃないでしょう！？何？用意してないの？」
「いや、そこまでは・・・」
「だめじゃない！もうっ、まだ暇？」
「ああ、うん」
「じゃあ今からすぐにミオちゃん連れて買い物に行ってきなさい！」
「わ、分かった」
ナータに追い立てられて部屋を出る。
「お前は行かないのか？」
「私はそんなに暇じゃないの」
「そうか」
「でもその店行くならバッグお願い」
「またバッグかよ」
「いいのよ。いくらでも欲しいの！じゃ、お願いね」
ヒラリと手を振ってドアを閉められた。
「じゃぁ、行こうか」
パーティーのアイテムか・・・。
店で聞いたらなんとかなるかな？
ミオを連れてまたあの店に行ってみることにした。

皇太子の誕生日４

着いたのはたぶん東京で言えば銀座とかその辺り。
四方を見上げるばかりのビルに囲まれ、どの建物もきれいで洗練されたデザインだ。
その中の一つ、路面に面した高級そうなブティックに入った。
「まぁぁ！いらっしゃいませ！！」
上品そうな人なのにパワフルな話し方の人だな・・・。
「この間はどうも」
「いいえ！本日はミオ様もご一緒ですのね！」
「ああ。ドレスだけじゃダメだって妹に怒られたよ」
レクセルはそう言って肩をすくめる。
「まぁそうですか、おほほ・・・」
綺麗な人だな。
ミオは店員を見てそんな感想を持った。
レクセルにはこういう人の方が合ってるんじゃないんだろうか。
こうやって美男美女が並んでいると自分がみじめに思えてくる。
すらりと背が高く、体のラインにメリハリがあり、爪の先までできれいに飾り立ててある。
私なんて背もそんなにないし、胸だってないし、頭だってないし。
店員さん、こんなところで働いているくらいだ、きっとすごい頭も良くてしっかりしてるんだろう。
「ではこちらへ」
そんなことをぽやぽや考えていたら笑顔の店員さんに手を取られて奥へ入る。
「あ、はい」
誘われてスツールに座る。
「あのドレスでしたらこちらのハイヒール、手袋もご入り用ですね。帽子もあるといいですわね。バッグはこちらなんていかがでしょう・

・・」
あっという間にずらずらずらっとたくさんの商品を並べられた。
ひえー・・・。こんなの選べないよ・・・。
そしてふっと値札に目がいった。その値段に目を疑う。
え、こんなに高いの・・・？
自分にもようやくこの帝国のお金の価値概念が分かってきた。
例えばこの繊細な飾りのついたハイヒールの値段は２６０．４ゼル。
この帝国でお昼ご飯を食べようと思ったら１ゼル払って２００レトお釣りをもらうくらいで十分食べれる。
なのにこの靴一足で２６０ゼル・・・？
「や、だめ、こんなの買えない・・・」
「お客様・・・？」
急に及び腰になったミオを見て慌てる店員。
きっとこの時少し自信を失っていたんだと思う。
「ミオ？」
店内をうろついていたレクセルもやってきた。
「ど、どうした？」
「だって、高い・・・」
不安げな顔でレクセルを見上げる。
「気にするなよ、大丈夫だから」
レクセルは笑ってそう言ってくれたが、
「でも、だめ、いらない。こんなに高いの」
と言うと、その言葉のどこにかちんときたんだろう。
レクセルの顔は急に不満げになり、
「分かった、帰ろう」
と、ぷいと踵を返して入口へと歩く。
「オ、オードヴェル様、お待ちを・・・」
ミオは慌ててその後を追う。
「ま、またのお越しをお待ちしています・・・」

非常に残念そうな店員さんの声を後にして店を出る。
人の行き交う大通りを歩いている間中、レクセルは無言。いつも歩調を合わせて歩いてくれるのに今は小走りにならないとついていけない。時刻はもう夕方。全天候型のこのドーム都市でも、寒暖の差を人工的に作っているので冷たい風が吹き抜ける。
待って、と言いたいが言えるはずもなく。
リフターに乗って隣に座ると、やっと言い訳を言えた。
「あの、あのね、レクセル。私ね、本当、普通の一般庶民だったの。日本は身分とか階級とかないし。いつもね、お母さんは家計が苦しいって家計簿見つめてるし、新しく建てた家もね、ローンがまだ15年も残ってるし。うちのお兄ちゃん大学生なんだけど、私立の学校行ったから学費が高くてね。だからいっつも節約、節約でたまにお金使うっていっても近くの温泉旅行とかそんなんで、贅沢なんてね、本当敵でね、あんな高いの買ったことないし、見たこともないし・・・」
「ミオ、ちょっと黙りなさい」
「でもね、あの・・・」
さらに言い募ろうとすると、レクセルは渋面のままリフターを路肩に寄せて停めた。
「？あ、あの、レクセル、あの・・・」
「黙りなさい」
そう言うとレクセルは手を伸ばしてミオの顎を捕らえ、横を向かせてその唇を塞いでしまった。
「×××！」
「おとなしくなったな」
そ、それはずるい・・・。ミオは言い募る気力を奪われてそのまま黙る。
レクセルは名残惜しそうに舌先でミオの唇を舐めてからやっと顔を離し、運転シートに戻って背もたれに背を預けて話しだす。
「俺はね、ミオ」

「は、はい・・・」
「君に窮屈な思いはさせたくないと思って自由にさせてきた。地球という異文化の星から来て、急にはなじめないだろう？だからあまりとやかく何々をしろとか言ってこなかったはずだ」
「う、うん」
「それに俺は貴族だ。そして俺と結婚するとなると君も貴族になる。そしてそれには様々な責任や儀礼、しきたりが付随してくる。血縁関係も重要だ。でもそれを急に覚えろと言っても無理な話だ」
「うん・・・」
「でもいつまでもそのままという訳にはいかない。今までは一般庶民として暮らしてきたかもしれないが、これからは俺の伴侶となる。なら、その生き方を覚えて欲しい。急かすつもりはもちろんないが」
「・・・」
「どうした？」
「いや、すごくちゃんと考えててくれてたんだなぁって・・・」
惑星オーで何も考えずにレクセルが帰って来ないだのなんだの不満を言っていた自分が恥ずかしくなった。何も知らない小娘なんかレクセルにとってはお荷物でしかない。貴族のきの字も知らないし、立ち居振る舞いに至ってはあか抜けない子供っぽいガキだ。
そんな自分に何も言わずに自由にさせてくれてた。それはすごいことじゃないだろうか。
もしも自分にそんな子供の面倒見させられたらどうしただろう？あれこれと自分の思うように指図して気に入らなければ怒ったりしないだろうか。こんな風に待っていられるだろうか・・・。
改めてその懐の深さを思い知った気がした。
「君にそんな目で見られるのは悪くないな」
レクセルは照れたように視線を合わせずに小さな声で言う。
「うん、惚れ直しちゃった」
「全く、君ってのは・・・」
「何？」

「いや、まぁ、とりあえず買い物の続きをしよう。それと君はもう少し贅沢を教えた方がよさそうだ」
レクセルは少し笑って再びリフターを動かし始めた。

皇太子の誕生日5

帝都の中心街、最も多く人の集まる交通の要衝地。
そのど真ん中のホテル。シティホテルなんかじゃない、帝国のＶＩＰ達のための歴史ある高級ホテル。
ロータリーで降りてそのきらびやかな外観を見ているだけでくらくらと目が眩んでしまう。
「ここのホテルは昔から贔屓にしててね。支配人とも知り合いだから・・・って大丈夫かい？」
「ちょっと目が眩んで・・・」
「しっかりしてくれよ。これからはこれを当たり前に思ってもらわなくちゃ」
こ、これが当たり前・・・。違う、違いすぎる・・・。
家族で行った安普請の旅館を思い出して相当の意識改革が必要だと思い至った。
大丈夫かな・・・。
知らずふっとため息が漏れる。
「・・・君のそんな憂い顔が見たくなくて、俺はずっと君を領地に閉じ込めていたのかもな」
レクセルが心配げに肩を引き寄せた。
「ん・・・？」
「住んで来た世界が違うんだ。だからそんなに自信を失くさないでほしい。嫌だったり、無理なことはさせたくない。こんなことで君が俺から離れてしまう、そんなのは嫌だ・・・」
「レクセル・・・」
「こんな時家名や血筋が鬱陶しくなる。俺が何の地位も持たないただの男だったらよかったと。好きになった女と一緒になる、そんな簡単なこともできないのに誰もがこの小さな襟章をうらやましいという」

家紋の入った襟の小さなバッチ。貴族の証。
「ごめんなさい・・・。努力するね。レクセルに似あうような女になる」
「本当はそのままでいいんだけどね。君に余計な重荷を負わせてしまう。すまない」
「ううん。きっとそのうち慣れる、と思う・・・」
「うん、そのためにもまずここからだな」
やっとこさ入口に向かって歩きだす。
ずっと側で待っていたベルボーイがやっと出番が来たとばかりに案内してくれた。
き、聞かれてた・・・？うう・・・。
ホテル一つに入るだけでこんなにレクセルに言われなきゃ入れないなんて・・・、がんばらなきゃ・・・。

「お久しぶりで御座います。オードヴェル様」
でっぷりと太った血色の好い男性が迎えてくれた。支配人だろう。
「やぁ、また太ったかい？」
「いやいや、これでも痩せたんですよ、髪の分だけね」
言って二人笑う。確かに頭はだいぶ寂しいことになっている。
「今日はお泊りですかな？」
支配人はちらりとミオに目を遣って問う。
「そうしたいのはやまやまだけどね」
レクセルはミオを見て肩をすくめてウィンクしてみせた。はは・・・。
「この子に合う靴やアクセサリーを探してるんだ。皇子の誕生日会に呼ばれてる」
「それはそれは慶賀なことにございます。当ホテルには一流のブランドが揃っております故、ご満足いただける品をご用意できると思います」
「うん、頼んだよ」

「はい、お任せ下さい」
「ラウンジバーで待ってる。用意できたら一度見せて欲しい」
「はい、かしこまりましてございます」
支配人は恭しく頭を下げる。
「ミオ、自分が一番だって顔してるんだよ」
いえ、もう無理です・・・。と言いたかったがぐんばると言った手前、顔に力を入れて情けない表情をしないようにする。
その顔にレクセルは吹き出す。
支配人はさすが眉ひとつ動かさないが。
「や、ごめん・・・。じゃあ待ってるよ」
「うん」
「さ、こちらへ・・・」
支配人の後についてホテルの中を移動する。
後はまあ、あれだ。数人の女性に囲まれて衣装をとっかえひっかえ。
久し振りに王宮を思い出した。こんなに騒がしくはなかったけど・・・。
あの頃こそ本当に何も考えてなかったよな・・・。レクセルに会えないのが悲しくて悲しくてそれを考えないようにするのが精一杯で、それが却って功を奏したのか気後れはしなかったよな。
王宮は本当閉鎖空間だったし。
だけどこれからは・・・。
「これでいかがでしょう」
あの紺のドレスに短めの白い手袋、ストーンをふんだんに使ったジュエリーサンダル、銀色のクラッチバッグ。ネックレスとイヤリングは控えめだが揃いのもの。髪は高く結って一つにまとめただけ。そこに花を模した髪飾り。
王宮のお姫様ではない、一人の女性として、レクセルの側にいなくちゃならない。
鏡の前の自分は年齢より幾分大人に見える。

これなら少しはましかも。

「上出来だね」

レクセルはミオを見ると目を細めて笑った。

「あれ、何か飲んだ・・・？」

レクセルの息が少し酒臭い。

「ちょっとだけさ」

それにしては顔が赤くないか。

「フロアに行こう。ダンスだ」

「えええ！？」

「踊れるだろう？」

「ちょ、ちょっとだけ。でももう忘れたし・・・わわわ」

ダンスのレッスンは王宮で少し習った。でもほんの基本だけ。もう忘れちゃったよー。

でもレクセルは強引に手を引っぱってフロアへと連れ出した。

確かにこのラウンジは生演奏で曲が流れてるけど、そんな踊るようなとこなんだろうか？

でもちょっと広めの場所に出ると、演奏家たちが気を利かせてゆっくりめの音楽に変える。

上品な一流の人たちは見て見ぬふりだし。

向かい合って手を取って忘れかけのステップを思い出す。

「無理に踊らなくていい。このまま・・・」

寄り添って左右に少し揺れるだけのダンスとも言えないダンス。

「君をこのまま帰したくないな」

帰して下さい、お願いします。

「すごくきれいだ。素敵だよ」

いいえ、きれいで素敵なのはお金のたっぷりかかった衣装のせいです。

「全く、これだけ言ってもそんなに頑ななのは、俺に対する挑戦かい？もっとも、相手が手ごわいほど燃えるタイプでね」

「レクセル、もう、やめて・・・。だって、そんな、まだ・・・」
ぎゅっと目をつぶっていやいやと首を振る。
レクセルはそんなミオを愛おしそうに見つめる。
「ごめん。意地悪して悪かった。ちゃんと帰すから、そんなに固くなるなよ。ああ、いい夜だ、最高だね」
レクセルは上機嫌のまま曲が終わるまでダンスを踊り続けた。

「遅い」
ナータさんの家に帰ると鬼の形相で出迎えられた。
「ミオちゃんをこんな時間まで連れまわして。未成年者略取の容疑で通報するわよ」
「それだけは勘弁・・・。いや、楽しくて・・・」
レクセルはお酒のせいかへらへらして答える。
「何！？お酒飲んでるの！？何してんのよ兄さん！」
「少しだけだよ。そんなに怒るなよ」
「怒るわよ！連絡もないし！もうとっとと帰れこの酔っ払い」
「はいはい、帰りますよー。じゃあな、ミオ」
「うん。気を付けてね」
「明日は俺仕事だから会えないけど、明後日の皇子のパーティーには迎えに来る。それまでゆっくりしてるといい」
髪をなでられ、キスされるかと思ったが、ナータさんの一睨みでやめたらしい。背後が怖い・・・。
レクセルはふらふらとしながら帰っていった。
「でもあんな兄さんのはしゃいでる姿初めて見た。よっぽどミオちゃんとのデートが嬉しかったのねぇ」
はしゃい・・・でるのか、あれで。
「まぁ、いいもの見れたからいいか。さ、疲れたでしょ。シャワー浴びてもう寝ちゃいなさい」
「はい」
「明日は女同士でデートしましょうか」

「はい！あ、そうだここってオーブンあります？」
「ああ、あるわよー。全然使ってないけどね。何？何か作るの？」
「はい。皇子の誕生日プレゼントにクッキー焼こうかと」
「皇子に手作りクッキー！最高！きっと初めてなんじゃない？そんなの」
ナータさんは手を叩いて笑った。
「ええっと、だめですか？」
「ううん。そういうのの方がかえって新鮮でいいかもね。皇族なんてよく分かんないし」
「は、はぁ」
「じゃ明日はクッキーの材料も買ってこようね」
そうしてその日はベッドに入ると3秒もしないで眠りについた。

皇太子の誕生日6

晴れ渡った空の下（ドームに覆われたこの都市では雨なんか降ったりしないが、それでも晴れの日は青空がみえて気持ちがよい）、皇子の誕生日パーティーは王宮の屋外庭園で催されていた。

ちょうど薔薇似た美しい花が咲き誇り、庭園を赤やピンクに染め、その中を美しく着飾った男女がさざめき合う。

テーブルには色とりどりのたくさんのご馳走が並び、揃いの衣装を着た楽人達が美しい音楽を奏で、皇子の誕生日を祝っていた。

「わー、すごい人・・・」

「今日はまた一段と盛大だな」

レクセルも目をみはっている。

その腕につかまりながら歩を進める。

歩いているとその広い会場のあちこちから女性達の意味ありげな視線が痛いほど突き刺さる。

鈍くさいと評判の自分でもよく分かる、羨望と嫉妬の眼差し。

だって今日のレクセル超かっこいいんだもん！

帝国の男性の礼装はタキシードに似ているけど、精緻な刺繍を施した襟を立ててたり、ボタンで前を留める代わりに細い鎖と飾りボタンで繋いだりしたジャケットに、胸元はクラヴァットのような白い飾り。

それが本当によく似合って・・・。

横にいるときれいに後ろになでつけた髪から整髪料のいい香りがただよってくる。

うう、きっと自分も負けてない・・・と思う。

朝からエステ付きの美容院みたいなとこに連れていかれて、頭から爪の先まで磨かれて化粧して髪のセットアップをしたのだ。

会場の中心地に近づくと、

「オードヴェル殿、お久しぶりですな！」

「ミオ様、覚えておられますか？ご健勝そうでなによりです・・・」
あっという間に人に囲まれた。にこやかにあいさつを返し、世間話を繰り返す。
皇子に辿り着く前に日が暮れそうだ・・・。
帝国では有名なんだな、私達。
が、ざわりとしたどよめきが起こったかと思うと人垣が揺れて道ができ、その先にはシャルセ皇子がいた。
「皇子！」
「ミオ！久し振りだな」
周りの人たちがさーっと動いて散っていく。さすが貴族の皆さま、位階順列をよくわきまえてらっしゃる。
レクセルも片膝をついて最敬礼をほどこす。
「よい、立ち上がれ」
「はっ」
皇子は落ち着いた色の濃い茶のジャケットに礼装用の白いマント、クラヴァットには見事な緑の宝石を飾り、誕生日の主役である証に花冠をかぶっていた。
「元気そうだな」
「はい。皇子も。あれ、少し背が伸びました？」
王宮にいた頃よりも背が高く感じる。
「ああ。君も健康的になって。君をそんな風に幸せにできるのが僕じゃなくて本当に残念だよ」
優しげに微笑み、曲げた人差し指の背でミオの頬をなでる。
「皇子ったら・・・」
ああ、後ろでレクセルがやきもきしている姿が目に浮かぶ。でも顔に出さないからきっと落ち着いてはいるだろうなー。
「そうそう、お誕生日おめでとうございます」
そう言ってミオはクラッチバッグから小さな包みを取り出す。
「これは・・・？」
「クッキーです。バッグがちっちゃいからこんなになっちゃったけ

ど、量より質ってことで」
皇子は受け取ってしげしげと見る。
「ミオ、君が・・・作ったのか？」
「はい」
「た、食べていいか？」
「もちろんです」
皇子が包みを開けようとすると、
「皇子、お毒味を・・・」
お付きの人が慌ててやってきて皇子の耳元で小さくささやく。
だが皇子はその言葉にかっとして、
「ミオが作ったものにそんなもの入ってるわけないだろう！いい、行こう、ミオ」
と、手首を掴まれた。
「お、皇子・・・」
その人は困った顔で追いかけてこようとしたが、
「しばらく二人で話がしたい。ついてくるな」
「・・・はっ」
ミオはちらりとレクセルを見ると、仕方ない、と言った風にうなずいていた。

やがて人気のない静かな白い薔薇の咲く庭園へとやってきた。
地面へ直に座り込んでのクッキー賞味となった。
「すごくおいしいよ、ミオ」
皇子はあっという間に全部食べてしまった。まぁ少ししか入ってなかったしね。
「よかった。こんなクッキー皇子の口に合わないんじゃないかと思ってちょっとどきどきしてました」
「そんなことはない！こんなおいしいクッキーは初めてだ。いくらでも食べたいよ」
名残惜しそうに袋についたカスさえ指でつまもうとする。

「お世辞じゃないといいけど」
「世辞なものか。そうだ、僕専用の菓子職人として王宮に来ないか？」
いいことをおもいついたとばかりにきらきらとした目で見つめられた。
「そんな。それでは本物の菓子職人さんが困ってしまいます」
ミオが困った顔でうつむくと、
「ふ・・・、僕もいい加減未練がましいな」
と皇子は一人ごちた。
「帝国の皇子だとて君の心一つ手に入らない・・・。いっそオードヴェルの奴を遠くの星域に飛ばして・・・」
「皇子・・・！」
「悪い、冗談だよ。君を泣かせるのは僕の本意じゃない。僕は君の幸せを願って君を手放した。本当、今さらさ」
肩をすくめて両腕を上げる。
「皇子にもきっといい人が現れます」
「だといいけど。そうだ、君にも何かお返しをしないとな」
「え、そんな、いいですよ」
「いいから。言ってごらん、何がいい？」
「ええっと・・・」
ミオは辺りを見渡して、
「じゃあ、あの薔薇を一輪」
「薔薇でいいのか？」
皇子は目を見開いてあきれたように言う。
「はい。とってもきれいなんですもの」
「よし、僕がとってきてやる」
皇子は立ち上がって薔薇に手を伸ばした。
「あっ、つっ・・・」
「お、皇子！」
皇子の指先から赤い血がぷくりとふくらんで出てきた。

「大変！」
ミオはバッグからハンカチを取り出し、皇子の手を取って傷口に押し当てる。
「・・・でも、皇子はこんなところで皇子なんですね」
「・・・？どういう意味だ？」
「だって、薔薇に棘があるって知らなかったんでしょう？きっとご自分で手折ったことなんてなかったんだなと思って」
「なるほど。確かにそうだな。しかしミオ、そんなに近づいたらあらぬ誤解を受けるよ」
「へ・・・？」
気づいて顔を上げると皇子の顔が間近に！
「わ、わわっ。ごめんなさい」
飛び退って距離を取る。
「ははっ。言わなきゃよかったな」
皇子は手に残ったハンカチを持って笑う。
「さぁ、そろそろ行かなきゃ。君ともっと一緒にいたいけど、まだたくさん挨拶が残ってるからね。こういうことには本当うるさいから」
「はい」
二人は並んで歩き、パーティー会場へと戻った。

誓い

次の日の朝、ニュースをカードペーパーで見て驚いた。
「皇太子熱愛発覚！救国の女神との秘密のキス」
の見出しとともに二人が向かい合ってキスしている（ように見える）写真が載っていた。
こ、これは・・・この写真は・・・。
「あらー、ミオちゃん見かけによらずやるわねー」
起きたばかりの髪の毛のぐしゃぐしゃなナータさんが後ろからカードペーパーを覗き込んで口笛を吹く。
「ちちち、違うんです、誤解です、これは・・・」
確かに皇子と超接近はしたけど、キスなんかしてない。なのに、なのに・・・。
「もう皇子と縁戻しちゃいなよ。うちの兄さんより絶対いいって」
ナータさんはあまり関心がないと言った風にそれだけ言うと手をぷらぷら振って洗面所へ向かった。
あああ・・・。

じっとりとした空気が車内に充満していた。
今日はもう惑星オーに帰らなければならない。
宇宙港専用ポートまでの道のりは、普通は行く道よりも戻る道の方が短く感じるというが・・・。
さっきから黙ったままのレクセル。
そうよね、ゼオルの時だって相当怒らせたんだもの。またこんなことになって怒り心頭に達しているに違いない。
でもでもでも誤解なのに、あれはキスしてたんじゃなくて怪我した皇子の手当てをしててちょっと近づきすぎただけで・・・。
「っく・・・くくく」
突然レクセルが笑いだした。

「レ、レクセル？どうしたの？」
「あっははは・・・いや、ごめん・・・でも・・・」
レクセルは笑いが止まらないといった風に腹を抱えている。
ちょ、運転は・・・。
「な、何・・・？」
「どうせあの記事は嘘なんだろう？」
「へ・・・？何で・・・？」
「顔に出やすい君が、もし本当に皇子とキスなんかしてたら昨日の帰り道あんなに普通そうにできるわけないじゃないか」
「あー！分かってて怒ったふりしてたのね！？ひどい！意地悪！」
「や、だからゴメンって」
「もー、知らないっ」
ぷいっと横を向いてやった。
「そんなに怒るなよ。ちょっとからかっただけじゃないか」
「ふーんだ」
「ふふ、まぁ、いいや。ちょっと寄り道するよ」
そう言うとレクセルはリフターの操作盤を操作して横道に入る。
しばらく走らせるとだんだんと人工物が減っていき、山あいの道へと進んでいく。やがて都会的な景色が一変して、木々の生い茂る森の中へと入る。
「わぁっ、海」
やがて視界が開けて木々の間から青い海が見えた。
レクセルは海の見える岬にリフターを停めると、降りるように言った。
「んー、気持ちいい！」
もう秋だというのに眩しいばかりの陽光がさんさんと降り注ぎ、潮風が甘い独特の香りとともに鼻孔をくすぐっていく。
しかしこんな所に何の用だろう？船の時間はいいんだろうか。
「ミオ」
とてもとても優しい声音でレクセルが名を呼んだ。

「ん？」
「君に指輪のお返しをしたい」
「指輪？」
何のこと？指輪なんてあげたっけ・・・？
「ひどいな、忘れたのか？くれただろう？見えない指輪」
「あーーー！」
思い出した。というか思い出したくなかった。
だって、恥ずかしい！
あの時は必死だったのよ、思い返せばなんちゅう恥ずかしいことを！
「お、お返しなんて別にいいよ！だいたいエア指輪なんだしお金かかってないし」
そう、心だけという意味でそういう風に渡したんだから、レクセルの心が私にある（あるよね？）今は別にいいんじゃないだろうか。心には心でってことで・・・。
「あんなに価値のある指輪は他にないさ。そうだろう？君の心なんだから」
きゃーーー。恥ずかしいっ！だからっ、あの時はもう考えてる余裕なんてなくて結果そういうことになったわけで！蒸し返さないで～。
レクセルは過去の自分の言動に悶え苦しんでいる私の前に跪いた。
それから懐から小さな箱を取り出した。
レクセルがその箱を開けるとキラキラと光る美しい宝石の付いた銀の指輪が入っていた。
「わぁ、きれい」
基本的に綺麗なものが好きなので、ころっと指輪に興味を奪われた。
「気に入った？」
「うん」
「はめさせてもらってもいいかな？」

「どうぞ」
そう言うとレクセルは迷いなく左の手を取って、薬指へとその指輪をはめた。
あれ？あの、その位置はもしかして・・・。
「君の星の風習ではこうなんだろう？結婚はまだ先だけど、婚約の証に」
そして優雅に手の甲にキスをした。
い、いつどこでそんな情報を・・・。まぁ、地球とはやりとりがあるみたいだけど・・・。
しかしキスは規格外ですぞ・・・。
レクセルは顔を上げると真剣な目で、
「ミオ、この海より深く君を愛することを誓う。そしてこの山のようにその愛の変わらないことを誓う」
と、顔がゆでダコよりも赤くなるような台詞をのたまった。
こ、これを言うためにわざわざこんなとこに・・・。うん、でも効果は覿面・・・。
海はどこまでも青く青く、山はどこまでも静か。それが変わることなど永久にないだろう。それが信じられるほどに。
「そして心だけでなく、その身体も俺のものになってくれないか？」
取られた手にきゅっと力が入り、にこやかにほほ笑みながら言う。
えー、それはそういう意味ですよね・・・。
「え・・・、っと、あの・・・、は、はい・・・」
ゆでダコの顔を見られたくなくてうつむきながら返事した。それにそんなに見つめないで・・・。
「よかった」
レクセルは満面の笑みを浮かべた。
「じゃあ、誓いの証に、キスして。君から」
自分から！？
ふときょときょとと周りを見回す。
「誰もいないって」

そ、そうだろうけど・・・、なんとなく・・・。
跪いたレクセルの顔はいつもより下方にある。これならしやすいかな・・・？
レクセルの両肩に手を置いて触れるだけのキスをする。
顔を離すと、
「それだけ？」
とまたもやにこやかな笑顔。
だめなんですかっ！？
仕方なしにレクセルにしてもらってるように何度も唇を押しつけてはその薄い唇を食(は)んだ。
「ふ・・・んん」
「上出来」
レクセルの腕が伸びてミオを抱きすくめる。
「きゃっ」
バランスを崩してミオはその胸に倒れこんだ。ミオ一人くらい倒れこんだくらいでは揺るがないたくましい胸と腕。その中にいるとひどく安心する。
ミオはその胸に頬を摺り寄せた。
「もうずっと離さない・・・」
そう耳元でささやき、レクセルはとろけそうなほどのキスをしてくれた。

誓い（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。
えー、これから先のエピソードもあるんですが、ここから先はＲ１８なので自重します。
その先の話もあるにはあるんですが（独立を望む地球ＶＳ帝国）、まぁ読みたいなんて人がいたら書きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0731j/

この宇宙（そら）の下で君と

2010年10月8日14時30分発行